# 第３章

# クリシュナはすべての化身の源である

### 第１節

*सूत उवाच*
जगृहे पौरुषं रूपं भगवान्महदादिभिः ।
सम्भूतं षोडशकलमादौ लोकसिसृक्षया ॥ १ ॥

スータ　ウヴァーチャ
*sūta uvāca*

ジャグリヘー　パウルシャンム　ルーパンム
*jagṛhe pauruṣaṁ rūpaṁ*

バハガヴァーン　マハドゥ・アーディビヒヒ
*bhagavān mahad-ādibhiḥ*

サンブフータンム　ショーダシャ・カランム
*sambhūtaṁ ṣoḍaśa-kalam*

アーダウ　ローカ・シスリクシャヤー
*ādau loka-sisṛkṣayā*

*sūtaḥ uvāca*—スータが言った; *jagṛhe*—受けいれた; *pauruṣam*—プルシャ化身としての完全分身; *rūpam*—姿; *bhagavān*—人格主神; *mahat-ādibhiḥ*—物質界の構成物質を使って; *sambhūtam*—こうして〜が創造された; *ṣoḍaśa-kalam*—16 の主要原則; *ādau*—始めに; *loka*—各宇宙; *sisṛkṣayā*—創造する意図で。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「主は、創造の初期にまずプルシャ化身という宇宙体にみずからを分身させ、物質界の創造に必要な要素を作った。こうして、物質の機能に必要な 16 の原則が最初に作られた。物質宇宙を創造するために為されたのである」

### 要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』は、人格主神シュリー・クリシュナがみずからを完全拡張体に分身させて物質宇宙を維持している、と述べています。つまり、この節のプルシャの姿は、この同じ原則の確認です。根源の人格主神ヴァースデーヴァ、すなわちヴァスデーヴァ王の子、

あるいは養父ナンダ王の子として名高い主クリシュナは、すべての富・すべての力・すべての名声・すべての美しさ・すべての知識・すべての放棄心を完璧にそなえています。主の富の一部は姿かたちの無いブラフマンやパラマートマーとして表われています。人格主神シュリー・クリシュナのこのプルシャの姿は、主の根源のパラマートマーの表われです。物質界の創造には３人のプルシャがかかわりますが、このカーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌ（Kāraṇodakaśāyī Viṣṇu）という名の姿が最初のプルシャです。別の２人のプルシャは、ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌ（Garbhodakaśāyī Viṣṇu）とクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌ（Kṣīrodakaśāyī Viṣṇu）で、後の節で説明されます。無数の宇宙がカーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌの体の毛穴から作りだされ、主はそのすべての宇宙にガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌとして入ります。

『バガヴァッド・ギーター』で、物質界は一定の期間を置いて創造され、やがて破壊される、と述べられています。創造と破壊は至高者の意志で為されますが、それは条件づけられた魂たち（*nitya-baddha*・ニッテャ・バッダ）のために行なわれます。ニッテャ・バッダ、つまり永遠に条件づけられた魂は自分固有の意識（アハンカーラ・*ahaṅkāra*）を持ち、その意識が魂を感覚の満足に誘うのですが、じつは本来その満足は魂には味わえないものです。主だけが「楽しむ側」であり、他の生命体はすべて「楽しまれる側」にいます。生命体は、支配されながら楽しんでいる、ということです。ところが、永久に条件づけられている魂はこの本来の立場を忘れ、自分が楽しみたいと強く望んでいます。条件づけられた魂には、物質界のなかで物質を楽しむ機会が与えられており、同時に自分本来の立場を理解する機会も与えられています。物質界で幾度となく誕生を繰りかえしたあとに真理を悟り、ヴァースデーヴァの蓮華の御足に身をゆだねた生命体が、永遠に解放された魂の仲間入りをして神の国に入ることを許されます。そのような幸運な魂は、作っては壊される物質創造界に二度と戻ってくることはありません。しかし、真理にめぐり会えない魂たちは、物質界が破壊されるときにふたたびマハトゥ・タットヴァ（*mahat-tattva*）に入っていきます。そして創造が再開されるときにマハトゥ・タットヴァは消えていきます。マハトゥ・タットヴァには、条件づけられた魂を含む物質現象界に必要なすべての構成要素がそなわっています。おもに、マハトゥ・タットヴァは、５つの濃密な物質要素と11の道具（感覚）の16要素に分けられます。たとえるならば「快晴の空に浮かぶ雲」です。精神界では、ブラフマンの光が満ちあふれ、すべてが崇高な光でまばゆく輝いています。マハトゥ・タットヴァは、広大かつ無限な精神界の一部に凝縮されて現われ、そのマハトゥ・タットヴァで覆われた部分が物質界です。精神界に出現するこの部分には、精神界全体と比べれば狭い領域にすぎませんが、その内部には無数の宇宙がただよっています。この宇宙はすべ

てカーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌ（別名マハー・ヴィシュヌ）によって一度に作りだされます。マハー・ヴィシュヌは、マハトゥ・タットヴァをただ見つめるだけで物質界に命を吹きこみます。

**第２節**

यस्याम्भसि शयानस्य योगनिद्रां वितन्वतः ।
नाभिह्रदाम्बुजादासीद्ब्रह्मा विश्वसृजां पतिः ॥ २ ॥

ヤッシャーンバハシ　シャヤーナッシャ
*yasyāmbhasi śayānasya*

ヨーガ・ニドゥラーンム　ヴィタンヴァタハ
*yoga-nidrāṁ vitanvataḥ*

ナービヒ・フラダーンブジャードゥ　アーシードゥ
*nābhi-hradāmbujād āsīd*

ブラフマー　ヴィシュヴァ・スリジャーンム　パティオ
*brahmā viśva-sṛjāṁ patio*

*yasya*—だれの; *ambhasi*—水の中に; *śayānasya*—横たわっている; *yoga-nidrām*—瞑想しつつ眠っている; *vitanvataḥ*—司っている; *nābhi*—臍; *hrada*—その窪みから; *ambujāt*—蓮華の花から; *āsīt*—表わされた; *brahmā*—生命体の祖父; *viśva*—宇宙; *sṛjām*—設計者達; *patiḥ*—主人。

そのプルシャは宇宙の水に横たわり、プルシャの臍のくぼみから蓮華の茎が伸びている。そしてその花の最上部に、宇宙のすべての監督者たちの筆頭であるブラフマーが誕生する。

**要旨解説**

最初のプルシャはカーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌで、その体の毛穴から無数の宇宙が放出されます。カーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌは、次にガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌとして各宇宙に入ります。ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌは自分の体から出た水で宇宙の半分を満たし、その上に横たわります。ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌの臍からは蓮華の茎が伸び、その花がブラフマーの誕生地になります。ブラフマーは全生物の父であり、宇宙の秩序を完璧に設計・機能させる管理者である半神たちの主人でもあります。その蓮華の茎のなかに 14 段階の天体系が存在し、土で構成された諸惑星はその中間に位置してい

ます。その上部にはさらに優れた天体系があり、頂点にブラフマローカ（Brahmaloka）・別名サテャローカ（Satyaloka）があります。中間の天体系の下には、アスラ（*asura*）や同類の物質主義的な生物が住む７つの低次の天体系があります。

ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌから、すべての生物に入っているパラマートマーでもあるクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌが分身されます。このヴィシュヌはハリ（Hari）とも呼ばれ、宇宙のすべての化身がクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌから分身されます。

これらの説明をまとめると、プルシャ・アヴァターラ（*puruṣa-avatāra*）には３つの姿があるということです。最初はマハトゥ・タットヴァのなかに集合的な物質構成要素を作るカーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌ、２番目は各宇宙に入るガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌ、そして３番目はすべての有機・無機の物質に入るパラマートマーであるクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌです。人格主神のこれらの完全分身の姿を知っている人は、神を正しく知っているということであり、その人物は、『バガヴァッド・ギーター』が明言しているように、誕生・死・老年・病気という物質的状態から救われます。このシュローカでは、マハー・ビシュヌ（Mahā-Viṣṇu）について要約されています。マハー・ビシュヌは、みずからの意志で精神界の一部分に横たわっています。カーラナ（*kāraṇa*）の海に横たわる主がその場所から物質自然界を見渡し、マハトゥ・タットヴァが瞬時に創造されます。こうして主の力によってエネルギーを帯びた物質自然が無数の宇宙を作りだされますが、それは木が無数の熟した果物で木全体を飾っていく様子に似ています。木や蔓（つる）の種は栽培者によって植えられ、やがて成長して多くの果物を実らせていきます。原因がなければなにも起こりません。そのことから、カーラナの海は「原因の海」と呼ばれます。*Kāraṇa*（カーラナ）は「原因」という意味です。無神論者が説く宇宙創造説を受けいれるのは愚かなことです。かれらの理論は『バガヴァッド・ギーター』で述べられています。無神論者は創造者の存在を信じませんが、創造について納得のいく説明はできません。物質自然界はプルシャの力を借りなければ何も作りだせません。プラクリティ（*prakṛti*）「女性」はプルシャ（*puruṣa*）「男性」との関係なくして子どもを作りだせないのと同じです。プルシャが受胎させ、プラクリティが産むのです。ヤギの首にぶらさがっている肉質の袋は乳首のついた乳房のように見えますが、そこからミルクは出ません。同じように、物体そのものに創造力があると考えてはなりません。プラクリティ（自然）を受胎させるプルシャの創造力を信じなくてはならないのです。主が瞑想をしながら横たわりたいと考えたからこそ、物質のエネルギーが無数の宇宙を作りだし、その宇宙のすべてに主が横たわり、すべての惑星やさまざまな物質要素が主の意志によって瞬時に作られました。主に

は無限の力があり、みずから手をくだすことなく、完璧な計画によって思うままに行動することができます。主より優れ、主に等しい者はいない――それがヴェーダの見解です。

### 第３節

यस्यावयवसंस्थानैः कल्पितो लोकविस्तरः ।
तद्वै भगवतो रूपं विशुद्धं सत्त्वमूर्जितम् ॥ ३ ॥

ヤッシャーヴァヤヴァ・サンムスタハーナイヒ
*yasyāvayava-saṁsthānaiḥ*

カルピトー　ローカ・ヴィスタラハ
*kalpito loka-vistaraḥ*

タドゥ　ヴァイ　バハガヴァトー　ルーパンム
*tad vai bhagavato rūpaṁ*

ヴィシュッダハンム　サットゥヴァンム　ウールジタンム
*viśuddhaṁ sattvam ūrjitam*

*yasya*—〜の人の; *avayava*—拡張体; *saṁsthānaiḥ*—〜に位置して; *kalpitaḥ*—想像される; *loka*—居住者達の惑星; *vistaraḥ*—さまざまな; *tat vai*—しかしそれは〜である; *bhagavataḥ*—人格主神の; *rūpam*—姿; *viśuddham*—純粋に; *sattvam*—存在; *ūrjitam*—優れた。

全宇宙の天体系はプルシャの分身の上にあるとされているが、主はその創造された物質の構成要素とはまったくかかわりがない。主の体に終わりはなく、きわめて優れた精神的存在である。

### 要旨解説

至高絶対真理者のヴィラートゥ・ルーパ（*virāṭ-rūpa*）あるいはヴィシュヴァ・ルーパ（*viśva-rūpa*）の概念は、主の超越的な姿をどうしても思いうかべることのできない初心者のために用意されています。そのような人にとって「姿」とは物質界の何かを指しているため、その正反対である絶対者の概念を知るには、初期段階で主の拡張された力に心を集中させることも必要です。上記のように、主はみずからの力をマハトゥ・タットヴァという形で拡張させ、そのなかには物質構成要素がすべて含まれています。主の力の拡張体と主自身とはある意味では同じですが、同時に主とマハトゥ・タットヴァと異なります。つまり、「主の力と主は同時に同じで違う」ということです。そのため、ヴィラートゥ・ルーパは（とくに非人格論者には）

主の永遠な姿と同じです。主の永遠な姿は、マハトゥ・タットヴァが創造されるまえから存在していたため、この節では、主の永遠な姿は完全に精神的、あるいは物質自然界を超越している、と強調されています。その超越的な姿は主の内的力によって表わされ、主の多種多様な化身は、マハトゥ・タットヴァとはまったく関係のない超越的性質をそなえています。

## 第４節

पश्यन्त्यदो रूपमदभ्रचक्षुषा
सहस्रपादोरुभुजाननाद्भुतम् ।
सहस्रमूर्धश्रवणाक्षिनासिकं
सहस्रमौल्यम्बरकुण्डलोल्लसत् ॥ ४ ॥

パッシャンティ　アドー　ルーパンム　アダブフラ・チャクシュシャー
*paśyanty ado rūpam adabhra-cakṣuṣā*

サハスラ・パードール・ブフジャーナナードゥブフタンム
*sahasra-pādoru-bhujānanādbhutam*

サハスラ・ムールダハ・シュラヴァナークシ・ナーシカンム
*sahasra-mūrdha-śravaṇākṣi-nāsikaṁ*

サハスラ・マウリ・アンバラ・クンダロールラサトゥ
*sahasra-mauly-ambara-kuṇḍalollasat*

*paśyanti*—見る; *adaḥ*—プルシャの姿; *rūpam*—姿; *adabhra*—完璧な; *cakṣuṣā*—目によって; *sahasra-pāda*—何千もの足; *ūru*—腿; *bhuja-ānana*—手と顔; *adbhutam*—素晴らしい; *sahasra*—何千もの; *mūrdha*—頭; *śravaṇa*—耳; *akṣi*—目; *nāsikam*—鼻; *sahasra*—何千もの; *mauli*—花輪; *ambara*—衣服; *kuṇḍala*—耳飾り; *ullasat*—すべて輝いている。

献愛者は、完璧な目をとおして、何千もの足・腿・腕・顔を持つプルシャの人知を絶した超越的な姿を見ることができる。その姿は無数の頭・耳・目・鼻を持ち、それぞれが王冠やきらめくイヤリングで飾られ、体にかけられた花輪がその美しさをきわだたせている。

## 要旨解説

物質的な感覚では超越的な主を知覚することはできません。しかし、献愛奉仕に使えばそのような感覚を正すことができ、その正された感覚をとおして、主は私たちに姿を現わしてくれます。『バガヴァッド・ギーター』では、超越的な主は純粋な献愛奉仕だけによって知覚する

ことができる、と明言されています。またヴェーダ経典も、献愛奉仕だけが私たちを主のもとに導き、主を私たちにしめすことができる、と述べています。『ブラフマ・サムヒター』では、主は献愛奉仕に専念している献愛者の目にいつも見えている、と言われています。ですから主の崇高な姿に関する情報は、献愛奉仕をとおして完璧な目でじっさいに主を見ている人物から入手しなくてはなりません。この世界でも、私たちの目がいつでもなんでも見られるとはかぎりません。じっさいに見た人から、あるいはじっさいの体験を持つ人をとおして、物事を見ることがあります。一般的なことでもそう言えるのであれば、超越的な物事ならまさにその手段が当てはまるはずです。ですから、忍耐強くありさえすれば、絶対真理者とそのさまざまな姿に関する超越的な教えが理解できます。初心者には主の姿は見えないでしょうが、優れた奉仕をする召使いはその超越的な姿を見ることができるのです。

### 第５節

एतन्नानावताराणां निधानं बीजमव्ययम् ।
यस्यांशांशेन सृज्यन्ते देवतिर्यङ्नरादयः ॥ ५ ॥

エータン　ナーナーヴァターラーナーンム
*etan nānāvatārāṇāṁ*

ニダハーナンム　ビージャンム　アヴャヤンム
*nidhānaṁ bījam avyayam*

ヤッシャーンシャーンシェーナ　スリジャンテー
*yasyāṁśāṁśena sṛjyante*

デーヴァ・ティリャン・ナラーダヤハ
*deva-tiryaṅ-narādayaḥ*

*etat*—これ（姿）; *nānā*—多種多様な; *avatārāṇām*—化身の; *nidhānam*—源; *bījam*—種; *avyayam*—不滅の; *yasya*—人の; *aṁśa*—完全分身; *aṁśena*—完全分身の部分; *sṛjyante*—創造する; *deva*—半神達; *tiryak*—動物; *nara-ādayaḥ*—人類、その他。

この姿（プルシャの２番目の姿）は、宇宙内に現われる多種多様な化身の源・不滅の根源である。この姿の部分体から、半神・人類・その他のさまざまな生物が創造される。

### 要旨解説

プルシャは、マハトゥ・タットヴァのなかに無数の宇宙を創造したあと、２番目のプルシャのガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌとなって各宇宙に入ります。宇宙に暗闇と空間だけが

広がり、身を横たえる場所のない状態であることを見たガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌは、自分の体の汗である水で宇宙の半分を満たし、その水の上に体を横たえます。この水をガルボーダカ（Garbhodaka）といいます。次に、主の臍から蓮華の茎が伸び、咲いた蓮華の花の上に、宇宙の管理の筆頭者であるブラフマーが誕生します。ブラフマーが宇宙の監督者になり、主みずからがヴィシュヌとして宇宙を維持します。ブラフマーはプラクリティのラジョー・グナ（*rajo-guṇa*）、つまり激性によって創造され、ヴィシュヌは徳の主になります。ヴィシュヌは物質的質を完全に超えているため、物質的な愛着を超越しています。このことはすでに説明したとおりです。ブラフマーからは、無知あるいは暗闇の性質を管轄するルドラ（シヴァ）が創造されます。シヴァは、主の意志に従って宇宙全体を破壊します。ゆえに、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァという３人の主宰神はガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌの化身です。ブラフマーからは、宇宙内の生物を作りだすダクシャ、マリーチ、マヌをはじめとする多くの半神たちが作られます。ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌは、ヴェーダ経典の『ガルバ・ストゥティ』という聖歌で、「何千もの頭を持つ主」などの記述で讃えられています。ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌは宇宙の主で、宇宙のなかに横たわってはいますが、つねに超越的な境地にあります。このこともすでに説明したとおりです。ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌの完全分身であるヴィシュヌは、宇宙内の生物の至高の魂で、宇宙の維持者すなわちクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌとして知られています。これが、根源のプルシャから現われる３つの姿（ヴィシュヌ）に関する説明です。また、宇宙のすべての化身はこのクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌから出現します。

さまざまな時代にさまざまな化身が現われ、なかにはマトゥシャ（Matsya）、クマーラ（Kūrma）、ヴァラーハ（Varāha）、ラーマ（Rāma）、ヌリシンハ（Nṛsiṁha）、ヴァーマナ（Vāmana）など、よく知られた化身が登場しますが、その数は無数です。このような化身はリーラー（*līlā*）化身と呼ばれています。次に、質的化身としてブラフマー（Brahmā）、ヴィシュヌ（Viṣṇu）、シヴァ（Śiva）（あるいはルドラ）が現われ、物質自然のさまざまな資質を管理します。

主ヴィシュヌはまさに人格主神その方です。主シヴァは、人格主神と生命体（ジーヴァ）の中間的存在にあります。ブラフマーはいつでもジーヴァ・タットヴァ（*jīva-tattva*）です。もっとも高尚な生命体、つまり主のもっとも高尚な献愛者は創造するための力を主から授かりますが、それがブラフマーです。主ブラフマーの力は、貴重な石や宝石に反射されている太陽の力に似ています。ブラフマーの地位に就けるほどの生命体がいないときには、主みずからブラフマーとなって、その地位に就きます。

主シヴァはふつうの生命体ではありません。主の完全部分体ですが、物質自然と直接かかわっているため、主ヴィシュヌとまったく同じ超越的な立場にいるのではありません。その違いは、牛乳と凝乳（チーズ）にたとえられます。凝乳も乳製品ですが、牛乳の代用品として使うことはできません。

次の化身はマヌです。ブラフマーの 1 日（太陽年で 430 万年×1,000 年）に 14 人のマヌが現われます。つまり、ブラフマーの 1 ヶ月に 420 人のマヌが、1 年間に 5,040 人のマヌが現われるということです。さらに、ブラフマーは 100 年間生きますから、ブラフマーの 1 生涯に 5,040 人×100 年のマヌ、つまり 504,000 人のマヌが現われることになります。宇宙の数は無数で、各宇宙にブラフマーが 1 人誕生し、そのすべてがプルシャの 1 呼吸のあいだに創造・破壊されます。このように、プルシャの 1 呼吸のあいだにどれほど多くのマヌが現われるかが容易に想像できます。

この宇宙内で名の知れたマヌは以下のとおりです。スヴァーヤンブヴァ・マヌとしてのヤギャ（Yajña）、スヴァーローチシャ・マヌとしてのヴィブ（Vibhu）、ウッタマ・マヌとしてのサテャセーナ（Satyasena）、タマーサ・マヌとしてのハリ（Hari）、ライヴァタ・マヌとしてのヴァイクンタ（Vaikuṇṭha）、チャークシュシャ・マヌとしてのアジタ（Ajita）、ヴァイヴァスヴァタ・マヌとしてのヴァーマナ（Vāmana）（現在はヴァイヴァスヴァタ・マヌ）、サーヴァルニ・マヌとしてのサールヴァバウマ（Sārvabhauma）、ダクシャサーヴァルニ・マヌとしてのリシャバ（Ṛṣabha）、ブラフマ・サーヴァルニ・マヌとしてのヴィシュヴァクセーナ（Viṣvaksena）、ダルマ・サーヴァルニ・マヌとしてのダルマセートゥ（Dharmasetu）、ルドラ・サーヴァルニ・マヌとしてのスダーマー（Sudhāmā）、デーヴァ・サーヴァルニ・マヌとしてのヨーゲーシュヴァラ（Yogeśvara）、インドラ・サーヴァルニ・マヌとしてのブリハドゥバーヌ（Bṛhadbhānu）。これらが、上記のように 43 億太陽年間に現われる 14 人のマヌです。

さらに、時代ごとに現われるユガーヴァターラ（*yugāvatāra*）の化身がいます。そのユガは、サッテャ・ユガ（Satya-yuga）、トゥレーター・ユガ（Tretā-yuga）、ドゥヴァーパラ・ユガ（Dvāpara-yuga）、カリ・ユガ（Kali-yuga）の 4 つに分けられます。各ユガの化身はそれぞれ異なる肌の色（白・赤・黒・黄色）で降誕します。ドゥヴァーパラ・ユガで主クリシュナは黒い肌で現われ、カリ・ユガで主チャイタンニャは黄金の色で降誕しました。

このように、化身についてはすべて啓示経典に書かれています。詐欺師が化身のふりをしても見破られる、ということです。化身というのであればシャーストラ（*śāstra*）の記述と一致するはずですから。いっぽう、ほんとうの化身は自分を主の化身であるとは公言しませんが、

偉大な聖者たちは啓示経典にある兆候を参考にして、化身であることを確認します。化身の姿や、その特定の使命については啓示経典に記載されています。

直接の化身のほかに、力を授かった化身も無数に現われ、そのことも啓示経典が述べています。その化身は直接・間接に力を授かっています。直接力を授かっている場合は「化身」、間接的に力を授かった化身をヴィブーティ（*vibhūti*）といいます。直接力を授かった化身には、クマーラたち（Kumāra）、ナーラダ（Nārada）、プリトゥ（Pṛthu）、シェーシャ（Śeṣa）、アナンタ（Ananta）などがいます。ヴィブーティについては『バガヴァッド・ギーター』の「ヴィブーティ・ヨーガ」の章で明記されています。そして、これらさまざまなカテゴリーの化身すべてが、ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌから拡張されているのです。

**第６節**

स एव प्रथमं देवः कौमारं सर्गमाश्रितः ।
चचार दुश्चरं ब्रह्मा ब्रह्मचर्यमखण्डितम् ॥ ६ ॥

サ　エーヴァ　プラタハマンム　デーヴァハ
*sa eva prathamaṁ devaḥ*

カウマーランム　サルガンム　アーシュリタハ
*kaumāraṁ sargam āśritaḥ*

チャチャーラ　ドゥシュチャランム　ブラフマー
*cacāra duścaraṁ brahmā*

ブラフマチャリャンム　アカハンディタンム
*brahmacaryam akhaṇḍitam*

*saḥ*—その; *eva*—確かに; *prathamam*—最初の; *devaḥ*—至高主; *kaumāram*—クマーラ（未婚）という名の; *sargam*—創造; *āśritaḥ*—〜の下で; *cacāra*—実行した; *duścaram*—実行するのが困難な; *brahmā*—ブラーフマナとして行動して; *brahmacaryam*—絶対者（ブラフマン）を悟るための戒律に従って; *akhaṇḍitam*—壊れることのない。

まず、創造の初期にブラフマーの未婚の息子たち（クマーラたち）がいた。かれらは独身の誓いをたて、絶対真理者を悟るために厳しい苦行を修練した。

**要旨解説**

物質創造界は、発生し、維持され、そして一定期間後、ふたたび破壊されます。そのため各宇宙は、物質界の生物の父ブラフマーのタイプに応じてさまざまな名称で呼ばれます。この節

で言及されているクマーラたちは、物質界のカウマーラ創造期に現われ、ブラフマンの悟りを広めるために未婚男性が修練する厳しい戒律に従いました。このクマーラたちは力を授けられた化身です。かれらはこの戒律を実践するまえに、正しい資質をそなえたブラーフマナになっています。つまり、ブラフマンを悟るに必要な資格はブラーフマナの家庭に誕生することではなく、ブラーフマナとしての正しい資質を身につけるということです。その資質があってこそ、ブラフマンを悟る方法を実践することができます。

**第７節**

द्वितीयं तु भवायास्य रसातलगतां महीम् ।
उद्धरिष्यन्नुपादत्त यज्ञेशः सौकरं वपुः ॥ ७ ॥

ドゥヴィティーヤンム　トゥ　バハヴァーヤーッシャ
*dvitīyaṁ tu bhavāyāsya*
ラサータラ・ガターンム　マヒーンム
*rasātala-gatāṁ mahīm*
ウッダハリッシャンー　ウパーダッタ
*uddhariṣyann upādatta*
ヤギェーシャハ　サウカランム　ヴァプフ
*yajñeśaḥ saukaraṁ vapuḥ*

*dvitīyam*—２番目; *tu*—しかし; *bhavāya*—繁栄のために; *asya*—この地球の; *rasātala*—最下等の領域の; *gatām*—行った; *mahīm*—地球; *uddhariṣyan*—持ちあげて; *upādatta*—確立した; *yajñeśaḥ*—至高の享楽者の所有物; *saukaram*—豚のような; *vapuḥ*—化身。

すべての儀式の結果を楽しむ最高の人物は、猪の化身（２番目の化身）の姿となって、地球を繁栄させるために宇宙の黄泉（よみ）の世界からすくいあげた。

**要旨解説**

この節は、人格主神の各化身がおこなう特定の使命について記述しています。使命を持たない化身は存在せず、その使命はつねに俗世界を超越しています。どのような生き物にも実行できない言葉かりです。この猪の化身の使命は、地球を黄泉の世界という不潔な領域から地球をすくいあげることにありました。猪はよく汚いところから物を取りだしますが、あらゆる力を持つ人格主神は、地球をそのような不潔な領域に隠したアスラたちに対抗してこの驚嘆すべき

神業を見せました。人格主神に不可能なことはなく、たとえ主が猪の姿になっても献愛者にとってはつねに崇高な行動であり、崇拝の対象であることに変わりありません。

**第８節**

तृतीयमृषिसर्गं वै देवर्षित्वमुपेत्य सः ।
तन्त्रं सात्वतमाचष्ट नैष्कर्म्यं कर्मणां यतः ॥ ८ ॥

トゥリティーヤンム　リシ・サルガンム　ヴァイ
*tṛtīyam ṛṣi-sargaṁ vai*

デーヴァルシトゥヴァンム　ウペーテャ　サハ
*devarṣitvam upetya saḥ*

タントゥランム　サートゥヴァタンム　アーチャシュタ
*tantraṁ sātvatam ācaṣṭa*

ナイシュカルミャンム　カルマナーンム　ヤタハ
*naiṣkarmyaṁ karmaṇāṁ yataḥ*

*tṛtīyam*—３番目; *ṛṣi-sargam*—リシ達の時代; *vai*—確かに; *devarṣitvam*—半神達の中の聖者であるリシの化身; *upetya*—受けいれて; *saḥ*—彼; *tantram*—ヴェーダの解説; *sātvatam*—とくに献愛奉仕のためにあるもの; *ācaṣṭa*—集めた; *naiṣkarmyam*—結果が生じない; *karmaṇām*—活動の; *yataḥ*—それから。

人格主神は「リシたちの時代」に、半神たちのあいだで聖者として知られるデーヴァリシ・ナーラダという姿で、力を授かった３番目の化身として現われた。ナーラダは献愛奉仕について説き、また結果が生じない活動を勧めているヴェーダの解説を集大成した。

**要旨解説**

偉大なリシ（聖者）であるナーラダは人格主神に力を授けられた化身で、全宇宙に献愛奉仕の教えを広めました。全宇宙のさまざまな惑星や生物のあいだで知られた主の偉大な献愛者たちは、すべてナーラダの弟子です。シュリーラ・ヴャーサデーヴァは『シュリーマド・バーガヴァタム』の編纂者であり、またナーラダの弟子です。またナーラダは、主への献愛奉仕について特筆しているヴェーダの解説書『ナーラダ・パンチャラートラ』の筆者でもあります。『ナーラダ・パンチャラートラ』は、結果に囚われている人々（カルミー）が活動に縛られないよう導いています。条件づけられた魂は、汗水流して働いて人生を楽しみたいと思っているため、

結果を求めて働くことに惹かれています。物質宇宙はそのような生き方をする生命体であふれています。結果に囚われた活動（果報的活動）には、経済を発展させようとするあらゆる計画が含まれています。けれども自然の法則が作用するために、どのような活動にも結果が生じ、行為者は良い悪い両方の反動に縛られます。良い活動の反動は物質的な繁栄として現われ、悪い活動の反動は物質的な苦しみという形で現われます。しかしいずれにしても、物中心の生活は、いわゆる幸福であっても苦しみであっても、結局は苦しみを味わうためにだけにあります。愚かな物質主義者は、制約のない世界で味わえる永遠の幸福についてなにも知りません。シュリー・ナーラダはこのような愚かな果報的活動者に真の幸福を悟る方法を教え、そして現世の行動をとおして精神的な解放の道に向かえるよう世界中の病める人々を導いています。医師は、乳製品を食べ過ぎて消化不良に苦しむ患者に「凝乳」という別の乳製品を勧めます。病気の原因と治療法は同じかもしれませんが、その処方箋はナーラダのような卓越した知識を持つ医師から受けなくてはなりません。『バガヴァッド・ギーター』も、「自分の労働の結果をとおして主に仕える」という同じ解決法を説いています。その方法が私たちを、*naiṣkarmya*（ナイシュカルミャ）、すなわち解放の道へと導いてくれるのです。

### 第９節

तुर्ये धर्मकलासर्गे नरनारायणावृषी ।
भूत्वात्मोपशमोपेतमकरोद् दुश्चरं तपः ॥ ९ ॥

トゥリェー　ダハルマ・カラー・サルゲー
*turye dharma-kalā-sarge*

ナラ・ナーラーヤナーヴ　リシー
*nara-nārāyaṇāv ṛṣī*

ブフートゥヴァートゥモーパシャモーテータンム
*bhūtvātmopaśamopetam*

アカロードゥ　ドゥシュチャランム　タパハ
*akarod duścaraṁ tapaḥ*

*turye*— ４番目に；*dharma-kalā*—ダルマラージャの妻；*sarge*—〜から生まれて；*nara-nārāyaṇau*—ナラとナーラーヤナ・リシという名前の; *ṛṣī*—聖者達; *bhūtvā*—〜になること; *ātma-upaśama*—感覚を抑制する; *upetam*—〜を達成するための; *akarot*—引き受けた; *duścaram*—ひじょうに厳しい; *tapaḥ*—苦行。

主は４番目の化身として、ダルマ王の妻の双子の子、ナラとナーラーヤナとなった。そして、感覚を抑制するために厳しくかつ模範的な苦行をおこなった。

**要旨解説**

リシャバ王が息子たちに諭したように、超越性を悟るためにみずから苦行を修練するタパッシャ（*tapasya*）は、人間に与えられた唯一の義務です。主は私たちに苦行について教えるために、みずから模範をしめしました。主は、すべてを忘れさった魂に優しいのです。だからこそみずから現われて、必要な教えをしめし、優れた子どもたちを代表者として遣わし、条件づけられた魂をすべて神のもとに呼びもどそうとします。人々の記憶に新しい主チャイタンニャも同じ目的で降誕しました。この鉄の時代に生きる堕落した魂たちに特別な恩寵をしめすためでした。ナーラーヤナの化身は、ヒマラヤ山脈の一帯にあるバダリー・ナーラーヤナ（Badarī-nārāyaṇa）でいまでも崇拝されています。

**第１０節**

पञ्चमः कपिलो नाम सिद्धेशः कालविप्लुतम् ।
प्रोवाचासुरये सांख्यं तत्त्वग्रामविनिर्णयम् ॥ १० ॥

パンチャマハ　カピロー　ナーマ
*pañcamaḥ kapilo nāma*

シッデヘーシャハ　カーラ・ヴィプルタンム
*siddheśaḥ kāla-viplutam*

プローヴァーチャースライェー　サーンキャンム
*provācāsuraye sāṅkhyaṁ*

タットゥヴァ・グラーマ・ヴィニルナヤンム
*tattva-grāma-vinirṇayam*

*pañcamaḥ*—５番目; *kapilaḥ*—カピラ; *nāma*—という名前の; *siddheśaḥ*—完璧な人物の中の筆頭者; *kāla*—時; *viplutam*—失われて; *provāca*—言われた; *āsuraye*—アースリという名前のブラーフマナに; *sāṅkhyam*—形而上学; *tattva-grāma*—創造された要素の総計; *vinirṇayam*—解説。

５番目の化身の主カピラは、完璧な生命体のなかでもっとも優れた人物である。主は、創造された物質構成要素と形而上学についてアースリ・ブラーフマナ（Āsuri Brāhmaṇa）に解説した。その知識が時の流れとともに失われていたからである。

**要旨解説**

創造された要素は 24 種類あります。そのすべての要素がサーンキャ哲学論で明確に説明されています。サーンキャ哲学は、ヨーロッパの学者には一般的に形而上学と呼ばれています。サーンキャ（*sāṅkhya*）の語源には「物質要素の分析によってきわめて明快に説明されるもの」という意味が含まれています。その説明が５番目の化身である主カピラによって最初に為されたことが、この節で述べられています。

**第１１節**

षष्ठम्  अत्रेरपत्यत्वं  वृतः  प्राप्तोऽनसूयया ।
आन्वीक्षिकीमलर्काय प्रह्लादादिभ्य ऊचिवान् ॥ ११ ॥

シャシュタハンム　アトゥレール　アパテャトゥヴァンム
*ṣaṣṭham atrer apatyatvaṁ*

ヴリタハ　プラープトー　ナスーヤヤー
*vṛtaḥ prāpto 'nasūyayā*

アーンヴィークシキーンム　アラルカーヤ
*ānvīkṣikīm alarkāya*

プラフラーダーディビャ　ウーチヴァーン
*prahlādādibhya ūcivān*

*ṣaṣṭham*—６番目; *atreḥ*—アトゥリの; *apatyatvam*—子ども; *vṛtaḥ*—祈りを受けて; *prāptaḥ*—得た; *anasūyayā*—アナスーヤーによって; *ānvīkṣikīm*—超越性に関して; *alarkāya*—アラルカに; *prahlāda-ādibhyaḥ*—プラフラーダやその他に; *ūcivān*—語った。

プルシャの６番目の化身はアトゥリ聖者の子息である。主は、化身を授かりたいと望んだアナスーヤーの体から誕生した。そしてアラルカ、プラフラーダ、他の人物たち（ヤドゥ、ハイハヤなど）に超越性について語った。

**要旨解説**

主は、リシ・アトゥリとアナスーヤーの子であるダッタートゥレーヤ（Dattātreya）という化身として誕生しました。ダッタートゥレーヤの主の化身としての誕生の歴史は『ブラフマー

ンダ・プラーナ』のなかで、献身的な妻に関連して述べられています。その箇所では、リシ・アトゥリの妻アナスーヤーは主ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァのまえで次のように祈っています。「主よ。私の苦行に満足していただけたのであれば、そして私が祝福を授かることを許していただけるのであれば、皆様が一つになった子をお授けください」。この祈りが３人の主に受けいれられ、主はダッタートゥレーヤとなって降誕し、精神魂に関する哲学をとくにアラルカ、プラフラーダ、ヤドゥ、ハイハヤ、その他の人物に説きました。

### 第１２節

ततः सप्तम आकूत्यां रुचेर्यज्ञोऽभ्यजायत ।
स यामाद्यैः सुरगणैरपात्स्वायम्भुवान्तरम् ॥ १२ ॥

タタハ　サプタマ　アークーテャーンム
*tataḥ saptama ākūtyāṁ*

ルチェール　ヤギョー　ビャジャーヤタ
*rucer yajño 'bhyajāyata*

サ　ヤーマーデャイヒ　スラ・ガナイル
*sa yāmādyaiḥ sura-gaṇair*

アパートゥ　スヴァーヤンブゥヴァーンタランム
*apāt svāyambhuvāntaram*

*tataḥ*—そのあと; *saptame*—７番目; *ākūtyām*—アークーティの胎内に; *ruceḥ*—プラジャーパティ・ルチによって; *yajñaḥ*—ヤギャとしての主の化身; *abhyajāyata*—出現した; *saḥ*—彼; *yāma-ādyaiḥ*—ヤーマと他の人々; *sura-gaṇaiḥ*—半神達と; *apāt*—支配した; *svāyambhuva-antaram*—スヴァーヤンブヴァ・マヌの時代の変換期。

７番目の化身はプラジャーパティ・ルチとその妻アークーティの子、ヤギャである。ヤギャは、子息で半神でもあるヤマ（Yama）たちの支援を受けながらスヴァーヤンブヴァ・マヌの統治時代を支配した。

### 要旨解説

物質界の秩序を維持する半神たちが占める地位は、高尚かつ敬虔な生命体に与えられます。そのような敬虔な生命体がいない場合、主みずからブラフマー、プラジャーパティ、インドラなどとなって降誕し、その役目を担います。スヴァーヤンブヴァ・マヌの時代（現在はヴァイ

ヴァスヴァタ・マヌの時代）には、インドラローカ（天上）惑星の王であるインドラの地位に就くにふさわしい生命体が見つかりませんでした。そのとき主はみずからインドラになっています。主ヤギャは、ヤマや他の半神たちといった自分の子どもたちの支援を受けながら宇宙を支配しました。

### 第１３節

अष्टमे मेरुदेव्यां तु नाभेर्जात उरुक्रमः ।
दर्शयन् वर्त्म धीराणां सर्वाश्रमनमस्कृतम् ॥ १३ ॥

アシュタメー　メールデーヴャーンム　トゥ
*aṣṭame merudevyāṁ tu*

ナーベヘール　ジャータ　ウルクラマハ
*nābher jāta urukramaḥ*

ダルシャヤン　ヴァルトゥマ　デヒィーラーナーンム
*darśayan vartma dhīrāṇāṁ*

サルヴァーシュラマ・ナマスクリタンム
*sarvāśrama-namaskṛtam*

*aṣṭame*—化身の８番目; *merudevyām tu*—～の妻であるメールデーヴィーの胎内に; *nābheḥ*—ナービ王; *jātaḥ*—誕生した; *urukramaḥ*—あらゆる力を持つ主; *darśayan*—しめすことで; *vartma*—道; *dhīrāṇām*—完璧な生命体達の; *sarva*—すべて; *āśrama*—生活の段階; *namaskṛtam*—～に讃えられて。

８番目の化身はリシャバ王、すなわちナービ王とメールデーヴィー王妃の子息である。主はこの化身となって完璧な道をしめした。それは、感覚を完全に抑制し、すべての階級の人々よって讃えられる人物たちが従う道である。

### 要旨解説

人間社会は生活の階級と状態に応じて８つの段階、すなわち４つの職務区分、４つの文化的発達区分に分けられます。識者階級・管理者階級・生産者階級・労働者階級が職務上の分類です。学習者生活・世帯者生活・引退者生活・放棄者生活が、精神的悟りを目指す４つの文化的発達の段階です。なかでも、放棄者（サンニャーシー・*sannyāsa*）階級の生活は他の段階の頂点とされ、制度上他のすべての階級と段階の精神の師にあたります。サンニャーシー階級にも、

完成境地に高められる４つの段階があり、それぞれクティーチャカ（*kuṭīcaka*）、バフーダカ（*bahūdaka*）、パリヴラージャカーチャーリャ（*parivrājakācārya*）、パラマハンサ（*paramahaṁsa*）と呼ばれています。パラマハンサが最高位にあり、すべての人々から尊ばれています。ナービ王とメールデーヴィー王妃の子のマハーラージャ・リシャバは主の化身であり、我が子たちにタパッシャ（*tapasya*）を修練して完璧な道を歩くよう教えました。タパッシャが私たちの存在そのものを清め、永遠で果てしなく広がっていく精神的幸福の境地に導いてくれるからです。だれもが幸せになろうとしていますが、永遠で無限な幸福がどこで手に入るのかだれも知りません。愚かな人々は物質的な感覚の喜びを本当の幸福として求めますが、感覚の喜びは犬や豚でも味わえる幸福感であることを忘れています。動物、鳥、獣なども同じ感覚的な喜びを味わっているのです。人間生活を含め、どのような生物の生活でもそのような幸福は味わえます。しかし人間生活は、そのような安っぽい幸福を味わうために用意されているのではありません。精神的悟りを得て、永遠不滅の幸福を味わうためにあります。この精神的悟りは、タパッシャ、すなわちみずからすすんで苦行の道を選び、物質的快楽を捨てることで得られます。物質的な喜びを抑制する訓練を受けた人物をディーラ（*dhīra*）「感覚に乱されない人物」といいます。ディーラだけがサンニャーシー階級を受けいれることができ、社会のすべての人々から崇敬されるパラマハンサの境地に徐々に高められていきます。リシャバ王はこの使命をまっとうし、肉体に必要な物事すべてを人生最後の段階で超越しました。これは愚か者が真似る境地ではなく、万民の崇敬を受ける稀有な境地です。

**第１４節**

ऋषिभिर्याचितो भेजे नवमं पार्थिवं वपुः ।
दुग्धेमामोषधीर्विप्रास्तेनायं स उशत्तमः ॥ १४ ॥

リシビヒル　ヤーチトー　ベヘージェー
*ṛṣibhir yācito bheje*

ナヴァマンム　パールテヒィヴァンム　ヴァプフ
*navamaṁ pārthivaṁ vapuḥ*

ドゥグデヘーマーンム　オーシャデヒィール　ヴィプラース
*dugdhemām oṣadhīr viprās*

テーナーヤンム　サ　ウシャッタマハ
*tenāyaṁ sa uśattamaḥ*

*ṛṣibhiḥ*—聖者達によって; *yācitaḥ*—〜の祈りを受けて; *bheje*—受けいれた; *navamam*—９番目の化身; *pārthivam*—地球の支配者; *vapuḥ*—体; *dugdha*—乳を搾る; *imām*—これらすべて; *oṣadhīḥ*—土地の産物; *viprāḥ*—ブラーフマナ達よ; *tena*—〜によって; *ayam*—この; *saḥ*—かれは; *uśattamaḥ*—美しく魅力的な。

ブラーフマナたちよ。主は９番目の化身で、聖者たちの祈りに応えて王 [プリトゥ・Pṛthu] の体を受けいれた。プリトゥ王はさまざまな産物を収穫するために土地を耕し、その甲斐あって地球は美しく魅力的な星になった。

### 要旨解説

マハーラージャ・プリトゥが降誕するまえ、先代の王で邪悪な心を持つ父親の悪政のため国内は混乱状態にありました。識者たち（聖者やブラーフマナ）は、主の降誕を祈ると同時に、先代の王を王座から放逐しました。篤い信仰心を持ち、市民がすべての面で幸せに暮らせるように治めるのが王の務めです。王がその義務を履行しなければ、識者階級はその王位を剥奪しなくてはなりません。しかし識者は王座には座りません。大衆を幸せにする重要な義務を帯びているからです。識者たちは王座に就かずに主の化身の降誕を祈り、その結果、主はマハーラージャ・プリトゥとして降誕したのでした。真に知的な人物、すなわちブラーフマナは政治的地位に対する野心はありません。マハーラージャ・プリトゥが地球から多くの産物を収穫し、また市民はそのような優れた王に恵まれて幸せに暮らせるようになったばかりではなく、地球全体も美しく魅力的な星になったのでした。

### 第１５節

रूपं स जगृहे मात्स्यं चाक्षुषोदधिसम्प्लवे ।
नाव्यारोप्य महीमय्यामपाद्वैवस्वतं मनुम् ॥ १५ ॥

ルーパンム　サ　ジャグリヘー　マートゥッシャンム
*rūpaṁ sa jagṛhe mātsyaṁ*

チャークシュショーダディィ・サンプラヴェー
*cākṣuṣodadhi-samplave*

ナーヴィ　アーローピャ　マヒー・マイヤーンム
*nāvy āropya mahī-mayyām*

アパードゥ　ヴァイヴァスヴァタンム　マヌンム
*apād vaivasvataṁ manum*

*rūpam*—姿; *saḥ*—主; *jagṛhe*—受けいれた; *mātsyam*—魚の; *cākṣuṣa*—チャークシュシャ（Cākṣuṣa）; *udadhi*—水; *samplave*—洪水; *nāvi*—船上に; *āropya*—続けて; *mahī*—地球; *mayyām*—～の中に沈んだ; *apāt*—守った; *vaivasvatam*—ヴァイヴァスヴァタ; *manum*—人類の父、マヌ。

チャークシュシャ・マヌの時代の後に全宇宙に洪水が起こり、世界が水中深く没したとき、主は魚の姿となって、ヴァイヴァスヴァタ・マヌを船に乗せて守った。

**要旨解説**

『シュリーマド・バーガヴァタム』を最初に解説したシュリーパーダ・シュリーダラ・スヴァーミーの意見によると、各マヌが交替した後にかならず洪水が起こるとはかぎりません。チャークシュシャ・マヌの時代のあとに起こったこの洪水は、サテャヴラタを驚嘆させるために起こりました。しかしシュリー・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは『ヴィシュヌ・ダルモーッタラ』、『マールカンデーヤ・プラーナ』、『ハリヴァンシャ』など由緒ある経典から確かな証拠として、各マヌが死去した後には必ず洪水が発生すると述べています。シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティーもシュリー・ジーヴァ・ゴースヴァーミーの見解を支持し、マヌが死去した後に発生する洪水について『バーガヴァタームリタ』から証拠を挙げています。このような理由以外にも、主は献愛者であるサテャヴラタに特別の恩寵を授けるために、この特定の時期に化身となって現わしたという事実があります。

**第１６節**

सुरासुराणामुदधिं मथ्नतां मन्दराचलम् ।
दध्रे कमठरूपेण पृष्ठ एकादशे विभुः ॥ १६ ॥

スラースラーナーンム　ウダディンム
*surāsurāṇām udadhiṁ*

マトゥナターンム　マンダラーチャランム
*mathnatāṁ mandarācalam*

ダドゥレー　カマタハ・ルーペーナ
*dadhre kamaṭha-rūpeṇa*

プリシュタハ　エーカーダシェー　ヴィブフフ
*pṛṣṭha ekādaśe vibhuḥ*

*sura*—有神論者達; *asurāṇām*—無神論者達の; *udadhim*—海で; *mathnatām*—攪拌（かくはん）; *mandarācalam*—マンダラーチャラの丘; *dadhre*—支えた; *kamaṭha*—亀; *rūpeṇa*—～の姿で; *pṛṣṭhe*—甲羅; *ekādaśe*—11 番目に; *vibhuḥ*—偉大な者。

主の 11 番目の化身は亀の姿である。その甲羅はマンダラーチャラ（Mandarācala）の丘を旋回させる軸となり、その丘は、宇宙の有神論者たちと無神論者たちによって攪拌棒として使われた。

**要旨解説**

昔、有神論者たちと無神論者たちが、不死身の甘露を海から作りだす計画をたてました。その甘露を飲んで不死身の体になろうとしたのです。そのとき、マンダラーチャラの丘が攪拌用の棒になり、亀として現われた主の甲羅は、海上で丘を支える場所（旋回軸）になりました。

**第１７節**

धान्वन्तरं द्वादशमं त्रयोदशममेव च ।
अपाययत्सुरानन्यान्मोहिन्या मोहयन् स्त्रिया ॥ १७ ॥

ダハーンヴァンタランム　ドゥヴァーダシャマンム
*dhānvantaraṁ dvādaśamaṁ*

トゥラヨーダシャマンム　エーヴァ　チャ
*trayodaśamam eva ca*

アパーヤヤトゥ　スラーン　アニャーン
*apāyayat surān anyān*

モーヒニャー　モーハヤン　ストゥリヤー
*mohinyā mohayan striyā*

*dhānvantaram*—ダンヴァンタリ（Dhanvantari）という名の主の化身; *dvādaśamam*—12 番目; *trayodaśamam*—13 番目; *eva*—確かに; *ca*—そして; *apāyayat*—飲ませるために与えた; *surān*—半神達; *anyān*—その他; *mohinyā*—妖艶な美しさで; *mohayan*—惑わせる; *striyā*—女性の姿で。

主は 12 番目の化身でダンヴァンタリとして降誕し、13 番目の化身では女性となって、その妖艶な姿で無神論者たちの心を虜にし、甘露を半神たちに飲ませた。

### 第１８節

चतुर्दशं नारसिंहं बिभ्रद्दैत्येन्द्रमूर्जितम् ।
ददार करजैरूरावेरकां कटकृद्यथा ॥ १८ ॥

チャトゥルダシャンム　ナーラシンムハンム
*caturdaśaṁ nārasiṁhaṁ*

ビブフラドゥ　ダイテェーンドゥランム　ウールジタンム
*bibhrad daityendram ūrjitam*

ダダーラ　カラジャイル　ウーラーヴ
*dadāra karajair ūrāv*

エーラカーンム　カタ・クリドゥ　ヤタハー
*erakāṁ kaṭa-kṛd yathā*

*caturdaśam*—14 番目; *nāra-siṁham*—主の半人間、半ライオンの化身; *bibhrat*—降誕した; *daitya-indram*—無神論者達の王; *ūrjitam*—強靭に作られた; *dadāra*—引き裂いた; *karajaiḥ*—爪で; *ūrau*—膝の上で; *erakām*—茎; *kaṭa-kṛt*—大工; *yathā*—まさにそのように。

主は 14 番目の化身でヌリシンハとして現われ、無神論者のヒラニャカシプ(Hiraṇyakaśipu)の強靭な体を、あたかも大工が棒を割るように、爪で引き裂いた。

### 第１９節

पञ्चदशं वामनकं कृत्वागादध्वरं बलेः ।
पदत्रयं याचमानः प्रत्यादित्सुस्त्रिपिष्टपम् ॥ १९ ॥

パンチャダシャンム　ヴァーマナカンム
*pañcadaśaṁ vāmanakaṁ*

クリトゥヴァーガードゥ　アドフゥヴァランム　バレーヘ
*kṛtvāgād adhvaraṁ baleḥ*

パダ・トゥラヤンム　ヤーチャマーナハ
*pada-trayaṁ yācamānaḥ*

プラテャーディトゥスス　トゥリ・ピシュタパンム
*pratyāditsus tri-piṣṭapam*

*pañcadaśam*—15 番目; *vāmanakam*—小びとのブラーフマナ; *kṛtvā*—〜の姿をして; *agāt*—行った; *adhvaram*—儀式の場; *baleḥ*—バリ王の; *pada-trayam*—3歩だけ; *yācamānaḥ*—乞うこと; *pratyāditsuḥ*—取りもどすことを考えている; *tri-piṣṭapam*—三天体系の王国。

15番目の化身で、主は小びとのブラーフマナ・ヴァーマナの姿として現われ、マハーラージャ・バリが執行していた儀式の場所を訪ねた。主の真意は三天体系すべてを奪いかえすことにあったが、3歩だけ施してくれるよう乞うた。

**要旨解説**

全能の神は、だれにでも、最初はひじょうに狭い土地から、そして宇宙の王国をさえ授けることができますが、同じように、ちょっとした土地を乞い願いつつ全宇宙を奪いさることもできます。

**第20節**

अवतारे षोडशमे पश्यन् ब्रह्मद्रुहो नृपान् ।
त्रिःसप्तकृत्वः कुपितो निःक्षत्रामकरोन्महीम् ॥ २० ॥

アヴァターレー　ショーダシャメー
*avatāre ṣoḍaśame*

パッシャン　ブラフマ・ドゥルホー　ヌリパーン
*paśyan brahma-druho nṛpān*

トゥリヒ・サプタ・クリトゥヴァハ　クピトー
*triḥ-sapta-kṛtvaḥ kupito*

ニヒ・クシャトゥラーンム　アカローン　マヒーンム
*niḥ-kṣatrām akaron mahīm*

*avatāre*—主の化身で; *ṣoḍaśame*—16 番目; *paśyan*—見ること; *brahma-druhaḥ*—ブラーフマナの命令に背くこと; *nṛpān*—王階級; *triḥ-sapta*—7回を3度; *kṛtvaḥ*—した; *kupitaḥ*—〜をして; *niḥ*—否定; *kṣatrām*—行政者階級; *akarot*—実行した; *mahīm*—地球。

主神の 16 番目の化身は主ブリグパティ（Bhṛgupati）で、行政者階級（クシャトリヤ）がブラーフマナ（識者階級）に背いたことに激怒し、クシャトリヤ階級を 21 回にわたって絶滅させた。

**要旨解説**

行政者階級のクシャトリヤは、規範となるシャーストラ（啓示経典）にもとづいて支配者を導く識者に従い、そして国を支配する立場にあります。支配者は識者の指示に従って国を治めるのです。クシャトリヤが学識者や知的なブラーフマナの命令に背くときには、その行政者たちは地位を剥奪され、より優れた行政にむけた対応策がとられます。

**第２１節**

ततः सप्तदशे जातः सत्यवत्यां पराशरात् ।
चक्रे वेदतरोः शाखा दृष्ट्वा पुंसोऽल्पमेधसः ॥ २१ ॥

タタハ　サプタダシェー　ジャータハ
*tataḥ saptadaśe jātaḥ*

サテャヴァテャーンム　パラーシャラートゥ
*satyavatyāṁ parāśarāt*

チャクレー　ヴェーダ・タローホ　シャーカハー
*cakre veda-taroḥ śākhā*

ドゥリシュトゥヴァー　プンムソー　ルパ・メーダハサハ
*dṛṣṭvā puṁso 'lpa-medhasaḥ*

*tataḥ*—そのあと; *saptadaśe*—17 番目の化身で; *jātaḥ*—降誕した; *satyavatyām*—サテャヴァティーの胎内に; *parāśarāt*—パラーシャラ・ムニによって; *cakre*—準備した; *veda-taroḥ*—ヴェーダという望みの木の; *śākhāḥ*—枝; *dṛṣṭvā*—見ることで; *puṁsaḥ*—一般大衆; *alpa-medhasaḥ*—知性に欠ける。

そのあと、主神の 17 番目の化身であるシュリー・ヴャーサデーヴァが、パラーシャラ・ムニを父としてサテャヴァティーの胎内から現われ、本来１つであるヴェーダをいくつかの分野に分け、さらに詳細に分類した。一般大衆が知性に欠けることを見てとったからである。

**要旨解説**

本来、ヴェーダは１つです。しかし、シュリーラ・ヴャーサデーヴァが根源のヴェーダをサーマ（*Sāma*）、ヤジュル（*Yajur*）、リグ（*Ṛg*）、アタルヴァ（*Atharva*）という４分野にわ

け、さらにプラーナや『マハーバーラタ』のようなさまざまな部門で説明しました。ヴェーダの言語や主題は一般人にはきわめて難しいとされています。高い知性をそなえ、なおかつ自己を悟ったブラーフマナが理解するものです。しかしいまのカリ時代は無知な人々であふれています。ブラーフマナを父として生まれた人々でさえ、資質はシュードラや女性よりも劣っています。再誕した者、つまりブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャは、サムスカーラ（*saṁskāra*）という浄化の儀式を受けることになっていますが、現代の悪影響のために、ブラーフマナと呼ばれる人たちや高貴とされる家系でさえ、気高い教養を失っています。そのような人々はドゥヴィジャ・バンドゥ（*dvija-bandhu*）「再誕者の友人や家族」と呼ばれています。しかしじつは、このドゥヴィジャ・バンドゥはシュードラや女性と同じ段階に分類されています。シュリーラ・ヴャーサデーヴァはヴェーダをさまざまな分野や部門に分けましたが、それはドゥヴィジャ・バンドゥ、シュードラ、女性たちのような知性の劣る人々のための配慮でした。

## 第２２節

नरदेवत्वमापन्नः सुरकार्यचिकीर्षया ।
समुद्रनिग्रहादीनि चक्रे वीर्याण्यतः परम् ॥ २२ ॥

ナラ・デーヴァトゥヴァンム　アーパンナハ
*nara-devatvam āpannaḥ*

スラ・カーリャ・チキールシャヤー
*sura-kārya-cikīrṣayā*

サムドゥラ・ニグラハーディーニ
*samudra-nigrahādīni*

チャクレー　ヴィーリャーニ　アタハ　パランム
*cakre vīryāṇy ataḥ param*

*nara*—人類; *devatvam*—神性; *āpannaḥ*—～の姿となって; *sura*—半神達; *kārya*—活動; *cikīrṣayā*—実行する目的で; *samudra*—インド洋; *nigraha-ādīni*—支配する、など; *cakre*—行なった; *vīryāṇi*—超人間的な力; *ataḥ param*—そのあと。

18 番目の化身で、主はラーマ王として降誕した。半神たちを喜ばせるために、インド洋を操ったり、対岸に住んでいた無神論者ラーヴァナ王を殺害したりすることで、超人間的な活躍を世にしめした。

## 要旨解説

人格主神シュリー・ラーマは人間の姿をまとい、半神たちを喜ばせるために、あるいは宇宙の秩序を維持する行政管理者として活躍するために降誕しました。ラーヴァナやヒラニャカシプなど多くの悪魔や無神論者たちは、主が定めた秩序に対抗する邪心ゆえに物質的科学や同類の活動の力で物質文化を高め、ひじょうに有名になることがあります。たとえば、機械を使って他の惑星に行こうとする試みは、確立された秩序に対する挑戦です。各惑星の環境はすべて異なり、主の法典が述べている特定の目的にもとづいてさまざまな種類の人類が収容されています。しかし、わずかな物質的発達を遂げたことで横柄になった不敬な物質主義者が神に挑戦することがあります。ラーヴァナがその一人で、必要な資格を無視した方法で一般人をインドラの惑星（天国）に送りたいと考えていました。天国に届く梯子を築けば、その惑星に入るために必要な敬虔な暮らしをしなくてもいい、というのがその理由です。また、主が定めた原則に反することも目論んでいました。シュリー・ラーマという人格主神の権威に挑み、主の伴侶シーターを誘拐さえしたのです。もちろん主ラーマは、半神たちの祈りに応え、この無神論者を罰する行動に出ました。主はラーヴァナの挑戦を受けてたち、その冒険の一部始終が『ラーマーヤナ』に記録されています。主ラーマチャンドラは人格主神であり、物質的に優れたラーヴァナという人間にでさえ不可能な超人的な行動を見せることができました。主はインド洋上に道を作りましたが、それは水に浮かぶ石の橋です。現代科学者は無重力について研究はしているものの、無重力を作りだすことはできません。しかし、無重力現象そのものが主の創造物であり、主はその力で巨大な惑星を宇宙空間に浮かばせているのですから、地球上でも石の重さをなくし、橋脚を使わずに海上に石の橋を築きました。それが神の力の表われなのです。

## 第２３節

एकोनविंशे विंशतिमे वृष्णिषु प्राप्य जन्मनी ।
रामकृष्णाविति भुवो भगवानहरद्भरम् ॥ २३ ॥

エーコーナヴィンムシェー　ヴィンムシャティメー
*ekonaviṁśe viṁśatime*

ヴリシュニシュ　プラーピャ　ジャンマニー
*vṛṣṇiṣu prāpya janmanī*

ラーマ・クリシュナーヴ　イティ　ブフヴォー
*rāma-kṛṣṇāv iti bhuvo*

バハガヴァーン　アハラドゥ　バハランム
*bhagavān aharad bharam*

*ekonaviṁśe*—19 番目に; *viṁśatime*—そして 20 番目に; *vṛṣṇiṣu*—ヴリシュニ王家に; *prāpya*—達成して; *janmanī*—誕生; *rāma*—バララーマ（Balarāma）; *kṛṣṇau*—シュリー・クリシュナ（Śrī Kṛṣṇa）; *iti*—そうして; *bhuvaḥ*—世界の; *bhagavān*—人格主神; *aharat*—取りのぞいた; *bharam*—重荷。

19 番目と 20 番目の化身で、主は、ヴリシュニの家系（ヤドゥ王家）に主バララーマと主クリシュナとして降誕し、世界の重荷を取りのぞいた。

**要旨解説**

この節で特筆されているバガヴァーン（*bhagavān*）という言葉は、バララーマとクリシュナは主の根源の姿であることを示唆しています。このことは後につづく節でさらに説明されます。この章の始めに説明したように、主クリシュナはプルシャの化身ではありません。根源の人格主神その方であり、バララーマは主の最初の完全分身です。バラデーヴァから最初の一連の完全拡張体であるヴァースデーヴァ（Vāsudeva）、サンカルシャナ（Saṅkarṣaṇa）、アニルッダ（Aniruddha）、プラデュムナ（Pradyumna）が現われます。主シュリー・クリシュナはヴァースデーヴァ、主バラデーヴァはサンカルシャナです。

**第２４節**

ततः कलौ सम्प्रवृत्ते सम्मोहाय सुरद्विषाम् ।
बुद्धो नाम्नाञ्जनसुतः कीकटेषु भविष्यति ॥ २४ ॥

タタハ　カラウ　サンプラヴリッテー
*tataḥ kalau sampravṛtte*

サンモーハーヤ　スラ・ドゥヴィシャーンム
*sammohāya sura-dviṣām*

ブッドホー　ナームナーンジャナ・スタハ
*buddho nāmnāñjana-sutaḥ*

キーカテーシュ　バハヴィッシャティ
*kīkaṭeṣu bhaviṣyati*

*tataḥ*—そのあと; *kalau*—カリの時代; *sampravṛtte*—結果として起こって; *sammohāya*—惑わせるために; *sura*—有神論者達; *dviṣām*—妬んでいる者達; *buddhaḥ*—主仏陀; *nāmnā*—その名前の; *añjana-sutaḥ*—その方の母はアンジャナーだった; *kīkaṭeṣu*—ガヤー（ビハール州）地方で; *bhaviṣyati*—起こるであろう。

次に、主はカリ・ユガの始まりに、ガヤー（Gayā）地方でアンジャナーの子すなわち主仏陀として降誕するであろう。信念の固い有神論者をねたむ者たちを惑わすためである。

**要旨解説**

人格主神に力を授かった化身である主仏陀は、ガヤー（現在のビハール州）でアンジャナーの子息として生まれ、独自の非暴力論を布教し、ヴェーダが認めている動物のいけにえの供儀祭さえも非難しました。主仏陀が降誕した当時、大衆は無神論者ばかりで、動物の肉をなによりも好んで食べていました。ヴェーダの供儀祭を口実にして、ほとんどの場所が屠殺場と化し、動物たちは無制限に殺されていました。主仏陀はそのような動物たちを哀れんで非暴力を唱えたのです。主は「ヴェーダの教えを信じない」と言い、動物を殺すことで生じる心理的な悪影響を強調しました。神に対する信念もなく、知性に欠けるカリ時代の人々は仏陀の教えに従うことで、神を悟る準備段階としてまず道徳律と非暴力を修練したのです。主は、自分の従者たちが神を信じない無神論者だったために惑わしたのですが、かれらは神の化身である主仏陀に絶対的な信念をいだきつづけました。こうして信仰心のない人々も主仏陀の姿で神を信じました。それが主仏陀の慈悲でした。神への信仰心のない人々が自分を信仰するよう導いたのです。

主仏陀が降誕する以前、屠殺行為は社会に著しく表われていました。人々は屠殺をヴェーダの供儀祭だと主張していました。ヴェーダが権威ある師弟継承をとおして伝えられなくなると、気まぐれな読者は美辞麗句で飾られた教義にまちがって導かれるものです。『バガヴァッド・ギーター』では、そのような愚かな学者（*avipaścitaḥ*・アヴィパシュチタハ）について解説されています。超越的な悟りに支えられた師弟継承を介して崇高な教えを授かるつもりのない愚かなヴェーダ学者は、かならず惑わされます。そのような輩は宗教儀式をすべてと考え、深淵な知識は持ちあわせていません。『バガヴァッド・ギーター』（第 15 章・第 15 節）では、*vedaiś ca sarvair aham eva vedyaḥ*（ヴェーダイシュ　チャ　サルヴァイル　アハンム　エーヴァ　ヴェーデャハ）「ヴェーダは、読者を至高主への道に徐々に導くためにある」と述べられています。ヴェーダ経典の主題は至高主、個々の魂、宇宙構造、そしてこれらの関係を知ることにあります。その関係が理解できたとき、その関係に伴うさまざまな活動が始まり、その活動の結果、神のもとに帰るという人生の究極目標がもっともかんたんな方法で達成されます。しかしざんねんなことに、

権限のないヴェーダ学者が浄化の儀式だけに心を奪われているために、ヴェーダを悟る自然な過程に支障が生じます。

主仏陀は、無神論に惑わされたそのような人々を有神論に導くシンボルと言えるでしょう。ゆえに、主はまず屠殺という悪癖を止めさせようとしました。動物の殺害者は神のもとに帰る道をさえぎる危険な要素で、２種類の殺害者がいます。魂は「動物」あるいは「生物」と呼ばれることがあります。ですから、「動物の殺害者」と「魂という自分の正体を見失った人」は、どちらも動物殺害者です。

マハーラージャ・パリークシットは、動物を殺す者だけが至高主の超越的な言葉を味わうことができない、と言いました。ですから、人々が神に行きつく道を歩く教育を受けるとき、「動物を殺す習慣をやめる」よう教わらなくてはなりません。動物殺害と精神的悟りにはなんの関係もない、と言うのはじつに愚かなことです。この危険な考えを吹聴する多くのサンニャーシーたちが、ヴェーダを装って動物殺害を促進させるカリ・ユガの助けを借りて続々と出没しています。この主題は、主チャイタンニャとマラナ・チャンド・カジ・シャヘブの会話で取りあげられました。ヴェーダの記述にある動物の供儀祭と、屠殺場でおこなわれている無制限の動物殺害は同じものではありません。アスラ、あるいは自称ヴェーダ経典の学者がヴェーダを動物殺害の根拠としたからこそ、主仏陀はヴェーダの権威を表向きに否定しました。主仏陀によるヴェーダの拒否は、人々を動物殺害という悪から救うために、そして哀れな動物たちが、「普遍の兄弟愛・平和・正義・平等」などと大言壮語する兄とも言うべき人間に殺されるのを救うためでした。動物殺害に正義はありません。主仏陀はそのまちがいを根絶するために、アヒムサー（*ahiṁsā*）の教えをインドのみならず全世界に広めました。

その理論からすると主仏陀の哲学は無神論です。至高主を認めず、ヴェーダの権威を否定する哲学だからです。しかし、それは主のカムフラージュでした。主仏陀は神の化身であり、ヴェーダ知識を広めた根源の人物です。ですから、主がヴェーダ哲学を否定するはずがありません。ただ表向きに否定したのです。神の献愛者をいつも妬んでいるスラ・ドゥヴィシャ（*sura-dviṣa*・悪魔）たちが、ヴェーダの記述を盾に動物殺害を擁護していたからであり、いまではこの行為が現代のサンニャーシーによって為されています。主仏陀はヴェーダの権威を根底から否定する必要がありました。これは表向きの教義にすぎません。ほんとうの無神論者として広めたのであれば、神の化身として認められなかったはずです。また、ヴァイシュナヴァ・アーチャーリャである詩人ジャヤデーヴァの超越的な詩歌でも讃えられなかったはずです。主仏陀は（そしてシャンカラーチャーリャも）、ヴェーダの権威を確立させるため時代に即応した手段でヴェーダの予備的原則を説きました。主仏陀もシャンカラーチャーリャも有神論の

道を開拓したのであり、だからこそヴァイシュナヴァ・アーチャーリャたち、とくに主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは神のもとに帰る道として、人々をその道へ導いたのです。

いま、多くの人々が主仏陀の非暴力運動に興味をしめしていることは喜ばしいことです。しかし、この問題を真剣にとらえて屠殺場をすべて閉鎖するでしょうか。それができないのであれば、アヒムサーの教義をかかげても無意味です。

『シュリーマド・バーガヴァタム』はカリ時代到来の直前（約 5,000 年前）に編纂され、主仏陀は約 2,600 年前に降誕しました。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』が予言した主仏陀の降誕は事実です。それが、一点の曇りもないこの経典の権威です。同じような予言は数多くしめされ、どれも相次いで実現しています。この事実は、条件づけられた魂の「間違いをおかし、眩惑され、人を騙し、不完全である」という欠陥とは無縁の『シュリーマド・バーガヴァタム』の威信を如実にしめすものです。解放された魂たちはこの欠陥を超越しています。だからこそ、遠い未来に実現するであろう出来事を予知・予言できるのです。

## 第２５節

अथासौ युगसन्ध्यायां दस्युप्रायेषु राजसु ।
जनिता विष्णुयशसो नाम्ना कल्किर्जगत्पतिः ॥ २५ ॥

アタハーサウ　ユガ・サンデャーヤーンム
*athāsau yuga-sandhyāyāṁ*

ダッシュ・プラーイェーシュ　ラージャス
*dasyu-prāyeṣu rājasu*

ジャニター　ヴィシュヌ・ヤシャソー
*janitā viṣṇu-yaśaso*

ナーンムナー　カルキル　ジャガトゥ・パティヒ
*nāmnā kalkir jagat-patiḥ*

*atha*—そのあと；*asau*—同じ主；*yuga-sandhyāyām*—ユガの接点で；*dasyu*—略奪者；*prāyeṣu*—ほとんど全員；*rājasu*—行政者達；*janitā*—主が誕生するであろう；*viṣṇu*—ヴィシュヌという名前の；*yaśasaḥ*—ヤシャーという姓名の；*nāmnā*—〜の名前で；*kalkiḥ*—主の化身；*jagat-patiḥ*—創造の主。

そのあと、２つのユガの接点で創造の主は、ヴィシュヌ・ヤシャー（Viṣṇu Yaśā）の子息カルキ（Kalki）化身として現われる。その時代、地球の支配者たちは堕落し、略奪者に成り果てている。

**要旨解説**

この節は主カルキという神の化身について予言しています。主は２つのユガの接点、すなわちカリ・ユガの終わりとサッテャ・ユガの始まりに降誕します。４つのユガ（サテャ、トゥレーター、ドゥヴァーパラ、カリ）の循環はカレンダーの月の訪れに似ています。現在のカリ・ユガは 43 万 2000 年つづきますが、クルクシェートラの戦争が終わり、パリークシット王の統治が終結してから 5000 年が経過しています。つまり、カリ・ユガの終わりまであと 42 万 7,000 年残っているということです。そして『シュリーマド・バーガヴァタム』の予言どおりに、この時代の終わりにカルキ化身が現われます。主の父の名前はヴィシュヌ・ヤシャーという博学なブラーフマナで、シャンバラ（Śambhala）という村の名前も記述されています。上述したように、これらの予言はすべて年代順に真実として実現されていくことでしょう。それが『シュリーマド・バーガヴァタム』のゆるぎない信頼性です。

**第２６節**

अवतारा ह्यसंख्येया हरेः सत्त्वनिधेर्द्विजाः ।
यथाविदासिनः कुल्याः सरसः स्युः सहस्रशः ॥ २६ ॥

アヴァターラー　ヒ　アサンキェーヤー
*avatārā hy asaṅkhyeyā*

ハレーヘ　サットゥヴァ・ニデヘール　ドゥヴィジャーハ
*hareḥ sattva-nidher dvijāḥ*

ヤタハーヴィダーシナハ　クリャーハ
*yathāvidāsinaḥ kulyāḥ*

サラサハ　シュフ　サハスラシャハ
*sarasaḥ syuḥ sahasraśaḥ*

*avatārāḥ*—化身; *hi*—確かに; *asaṅkhyeyāḥ*—無数; *hareḥ*—ハリ、主の; *sattva-nidheḥ*—徳の海の; *dvijāḥ*—そのブラーフマナ達; *yathā*—ありのままに; *avidāsinaḥ*—無尽蔵の; *kulyāḥ*—小川; *sarasaḥ*—広大な湖の; *syuḥ*—〜である; *sahasraśaḥ*—数千の。

ブラーフマナたちよ。あたかも無尽蔵の水源から流れでる無数の小川のように、主の化身を数えつくすことはできない。

**要旨解説**

この章で挙げられている人格主神の一覧は、これで完結したわけではありません。すべての化身を一部記載したにすぎないのです。ほかにも、シュリー・ハヤグリーヴァ、ハリ、ハンサ、プリシュニガルバ、ヴィブ、サテャセーナ、ヴァイクンタ、サールヴァバウマ、ヴィシュヴァクセーナ、ダルマセートゥ、スダーマー、ヨーゲーシュヴァラ、ブリハドゥバーヌなど、遠い昔に無数の化身が登場しています。シュリー・プラフラーダ・マハーラージャは祈りました。「主よ。あなた様は、水生動物・植物・爬虫類・鳥類・獣・人間・半神という生物の数ほどの化身で現われ、誠実な人々を守り、不誠実な者たちを破滅させるために降誕されました。さまざまなユガで、必要な状況に応じて降誕されたのです。カリ・ユガでは献愛者の姿で降誕されています」。カリ・ユガの化身とは主チャイタンニャ・マハープラブを指しています。『シュリーマド・バーガヴァタム』や他の経典の多くの箇所でも、主のシュリー・チャイタンニャ・マハープラブとしての化身について明確に記述されています。『ブラフマ・サムヒター』でも間接的に、「主は、ラーマ、ヌリシンハ、ヴァラーハ、マトゥシャ、クールマ、その他多くの化身として降誕していても、ときにみずから現われる」と述べられています。ですから、主クリシュナと主チャイタンニャ・マハープラブはじつは化身ではなく、あらゆる化身の根源の方です。これは次のシュローカで明確に説明されます。主は、記述しつくされていない厖大な化身の無尽蔵なる源です。しかしその化身は、人間にはとうていできるはずのない特別の並外れた神業によって見分けることができます。それが、直接・間接に力を授けられた化身であることを判断する一般的な証拠です。上記の化身の一部はほとんど完全部分体です。たとえば、クマーラたちは超越的な知識という力を授けられました。シュリー・ナーラダは献愛奉仕の力を授かりました。マハーラージャ・プリトゥは行政官の職務において力を授かりました。魚として現われたマトゥシャ化身は直接の完全部分体です。このように、主の無数の化身は、絶え間なく宇宙全体に現われています。滝から水が流れつづけるように。

**第２７節**

ऋषयो मनवो देवा मनुपुत्रा महौजसः ।
कलाः सर्वे हरेरेव सप्रजापतयः स्मृताः ॥ २७ ॥

リシャヨー　マナヴォー　デーヴァー
*ṛṣayo manavo devā*

マヌ・プトゥラー　マハウジャサハ
*manu-putrā mahaujasaḥ*

カラーハ　サルヴェー　ハレール　エーヴァ
*kalāḥ sarve harer eva*

サプラジャーパタヤハ　スムリターハ
*saprajāpatayaḥ smṛtāḥ*

*ṛṣayaḥ*—すべての聖者達; *manavaḥ*—すべてのマヌ達; *devāḥ*—すべての半神達; *manu-putrāḥ*—マヌのすべての子孫達; *mahā-ojasaḥ*—ひじょうに力強い; *kalāḥ*—完全部分体の部分体; *sarve*—すべて集合的に; *hareḥ*—主の; *eva*—確かに; *sa-prajāpatayaḥ*—プラジャーパティ達と共に; *smṛtāḥ*—知られている。

特別な力をそなえたリシ、マヌ、半神、そしてマヌの子孫は、主の完全部分体、あるいは完全部分体の部分体である。そのなかにはプラジャーパティ（Prajāpati）も含まれる。

**要旨解説**

比較的力の劣る生命体をヴィブーティ（*vibhūti*）といい、比較的優れた力を持つ生命体をアーヴェーシャ（*āveśa*）化身といいます。

**第２８節**

एते चांशकलाः पुंसः कृष्णस्तु भगवान् स्वयम् ।
इन्द्रारिव्याकुलं लोकं मृडयन्ति युगे युगे ॥ २८ ॥

エーテー　チャーンムシャ・カラーハ　プンムサハ
*ete cāṁśa-kalāḥ puṁsaḥ*

クリシュナス　トゥ　バハガヴァーン　スヴァヤンム
*kṛṣṇas tu bhagavān svayam*

インドゥラーリ・ヴャークランム　ローカンム
*indrāri-vyākulaṁ lokaṁ*

ムリダヤンティ　ユゲー　ユゲー
*mṛḍayanti yuge yuge*

*ete*—これらすべて; *ca*—そして; *aṁśa*—完全部分体; *kalāḥ*—完全部分体の部分体; *puṁsaḥ*—至高者の; *kṛṣṇaḥ*—主クリシュナ; *tu*—しかし; *bhagavān*—人格主神; *svayam*—本人; *indra-ari*—インドラの敵; *vyākulam*—乱されて; *lokam*—すべての惑星; *mṛḍayanti*—保護する; *yuge yuge*—さまざまな時代で。

これまで述べた化身はすべて、主の完全部分体あるいは完全部分体の部分体いずれかであるが、主シュリー・クリシュナは根源の人格主神である。これらの化身は、無神論者によって混乱が生じたときにかならず現われる。主は有神論者を守るために降誕するのである。

**要旨解説**

この節では、とくに主シュリー・クリシュナ・人格主神が他の化身と区別して表現されています。主は、いわれのない慈悲心ゆえにみずからの超越的住居から降誕する方であるため、アヴァターラ（*avatāra*）「化身」のなかに加えられています。アヴァターラは「降りてくる者」という意味です。主のすべての化身は、（主をも含め）特定の使命を果たすために物質界のさまざまな惑星に、さまざまな生物として降誕します。ときにはみずから降誕したり、さまざまな完全部分体や完全部分体の部分体が降誕したり、また主から直接・間接に力を授かったさまざまな部分体が物質界に降誕し、特定の役割を果たします。主は、すべての富・力・名声・美しさ・知識・放棄心を持つ方です。その富の一部が完全部分体やその部分体をとおして表わされるのは、「主の特定の任務が遂行されるためには、主のさまざまな力が表わされる必要がある」ということです。部屋の照明に小さな電球が使われているとしても、発電所がその小さな電球程度の電力しか供給できない、ということではありません。その発電所は、高い電圧が必要な巨大な発電機を動かせる電力も提供できます。同じように、主の化身は限られた力を表わすことがありますが、それは特定の時代にその程度の力が必要だということです。

たとえば、主パラシュラーマはブラーフマナに服従しないクシャトリヤたちを21世代にわたって殺し、主ヌリシンハはヒラニャカシプという強靭凶悪の無神論者を殺して無類の力をしめしました。ヒラニャカシプ王が眉を不機嫌そうに動かしただけで、他の惑星にいる半神たちでさえ震えあがるほど、王は恐ろしい力を持っていました。物質界の高位の惑星に住む半神たちは、もっとも裕福な人間さえはるかに凌ぐ寿命・美しさ・富・身の回りの品々など、あらゆる面で優れていました。そんなかれらでも、ヒラニャカシプを恐れていたのです。ヒラニャカシプがどれほどの力を物質界で誇っていたかが容易にわかるはずです。しかし、そのヒラニャカシプでさえ、主ヌリシンハの爪でずたずたに引き裂かれました。これは、どれほど物質的な力があっても、主の爪の力には太刀打ちできないという事実を物語っています。同じように、ジ

ャーマダグニャも主の力を発揮し、主に服従しなかった世界中の王たちを殺しました。主の力を授かった化身ナーラダも、完全拡張体化身のヴァラーハも、そして間接的に力を授かった主仏陀も、大衆の心に主への信仰心を刻みつけました。ラーマ（Rāma）とダンヴァンタリ（Dhanvantari）の化身は主の名声を、バララーマ（Balarāma）、モーヒニー（Mohinī）、ヴァーマナ（Vāmana）は主の美しさを表わしました。ダッタートゥレーヤ（Dattātreya）、マトゥシャ（Matsya）、クマーラ（Kumāra）、カピラ（Kapila）は主の超越的な知識をしめしました。ナラとナーラーヤナ・リシたちは主の放棄心をしめしました。このように、主のさまざまな化身は、間接的・直接的にさまざまな様相をしめしましたが、主クリシュナ・根源の主は人格主神の完璧な様相をしめしています。だからこそ、主がすべての化身の根源であることが確認できるのです。主シュリー・クリシュナがしめしたもっとも非凡な様相は、内的力をとおして表わされた牛飼いの乙女たちとの振舞いです。主がゴーピーたちと交わした崇高な娯楽はすべて、見かけは性的愛情であっても、崇高な存在・至福・知識の表われです。主とゴーピーたちが交わした娯楽という特別な魅力は、決して誤解されてはなりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、これらの超越的娯楽を第 10 編で取りあげています。主とゴーピーたちとの娯楽の崇高な特質を理解する境地に辿りつくために、『シュリーマド・バーガヴァタム』は、他の９編をとおして読者を徐々に高めようとしています。

シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーの言葉によると、由緒ある情報源がしめしているように、主クリシュナはすべての化身の源です。別の源から表わされた化身ということではありません。絶対真理のすべての兆候が主シュリー・クリシュナという人物のなかにあり、『バガヴァッド・ギーター』でも、主は「自分に等しいか、自分よりも優れた真理はない」と断言しています。この節にある *svayam*（スヴァヤンム）という言葉は、主クリシュナにはほかの源がないことを確証するためにとくに使われています。別の箇所では、特別の役割をしめす化身がバガヴァーン（*bhagavān*）と呼ばれることもありますが、「至高人格者」として宣言されることはありません。この節の *svayam* は、至高善としての優越性を表現しているのです。

至高善のクリシュナは唯一絶対の存在です。主は、スヴァヤン・ルーパ（*svayaṁ-rūpa*）、スヴァヤン・プラカーシャ（*svayam-prakāśa*）、タドゥ・エーカートゥマー（*tad-ekātmā*）、プラバーヴァ（*prābhava*）、ヴァイバヴァ（*vaibhava*）、ヴィラーサ（*vilāsa*）、アヴァターラ（*avatāra*）、アーヴェーシャ（*āveśa*）、ジーヴァ（*jīva*）など、みずからをさまざまな部分体に分身させ、そのすべてがそれぞれの人物・人格にふさわしい無数の力をそなえています。超越的学問に精通する博識な学者は、至高善クリシュナについて 64 の特質を挙げて慎重に分析しています。主の拡張体あるいはカテゴリーは、これらの特質の一部だけをそなえています。

しかしシュリー・クリシュナはその特質を 100 パーセントそなえた方です。そしてスヴァヤン・プラカーシャやタドゥ・エーカートゥマー、さらにヴィシュヌ・タットヴァであるアヴァターラの概念を含む主の個人的な拡張体は、これらの超越的特質の 93 パーセントをそなえています。アヴァターラでもアーヴェーシャでもなく、またその中間にも位置しない主シヴァは、約 84 パーセントの特質をそなえています。いっぽう、さまざまな生存状態にある個々の生命体（ジーヴァ）は、最大 78 パーセントの特質しかそなえていません。しかし生命体は、物質存在という条件づけられた立場ではわずかな量をそなえ、敬虔な生活の程度によってその量は変化します。もっとも完璧な生物は、1つの宇宙の最高管理者であるブラフマーです。ブラフマーは 78 パーセントの特質を完璧に持っています。その他の半神たちは同じ特質を低い割合で、人間はさらに少ない特質をそなえています。人間の完成の基準は、その特質を完全に 78 パーセントにまで高めることにあります。生命体は、シヴァ、ヴィシュヌあるいは主クリシュナほどの特質を持つことはぜったいにできません。78 パーセントの特質を完全にそなえることで神聖な存在になることはできますが、シヴァ、ヴィシュヌあるいは主クリシュナのような神にはなれません。いつかブラフマーになることはできます。精神界の住民である神聖な生命体たちは、ハリ・ダーマ（Hari-dhāma）やマヘーシャ・ダーマ（Maheśa-dhāma）と呼ばれる多様な精神的惑星に住む神の永遠な親交者です。すべての精神的惑星を超えた領域にある主クリシュナの住居は、クリシュナローカ（Kṛṣṇaloka）あるいはゴーローカ・ヴリンダーヴァン（Goloka Vṛndāvana）と呼ばれ、上記の特質の 78 パーセントを完全に高めた完璧な生命体が、現在の肉体を離れたあとにクリシュナローカに入ることができます。

### 第２９節

जन्म गुह्यं भगवतो य एतत्प्रयतो नरः ।
सायं प्रातर्गृणन् भक्त्या दुःखग्रामाद्विमुच्यते ॥ २९ ॥

ジャンマ　グヒャンム　バハガヴァトー
*janma guhyaṁ bhagavato*

ヤ　エータトゥ　プラヤトー　ナラハ
*ya etat prayato naraḥ*

サーヤンム　プラータル　グリナン　バハクテャー
*sāyaṁ prātar gṛṇan bhaktyā*

ドゥッカハ・グラーマードゥ　ヴィムッチャテー
*duḥkha-grāmād vimucyate*

*janma*—誕生; *guhyam*—神秘的な; *bhagavataḥ*—主; *yaḥ*—人; *etat*—これらすべて; *prayataḥ*—注意深く; *naraḥ*—人間; *sāyam*—夕方; *prātaḥ*—朝; *gṛṇan*—唱える; *bhaktyā*—熱心に; *duḥkha-grāmāt*—すべての苦しみから; *vimucyate*—解放される。

主の神秘的な降誕について、愛情をこめて、朝夕注意深く語る者はだれでも、生活にともなうすべての苦しみから解放される。

## 要旨解説

人格主神は『バガヴァッド・ギーター』で、主の超越的な誕生と行動の原則を知る者は、物質界という迷宮から逃れたあと主のもとに帰っていく、と述べています。物質界に降誕する主の化身の神秘性を正しく理解するだけで、物質の束縛から解放されるということです。ですから、私たちが幸福になれるようしめされた主の誕生と行動は、どれも俗界とは一切関係がありません。精神的な愛情を胸にいだき、神秘のベールに包まれた主の誕生と活動を知ろうとする人だけがそのベールを取りはらうことができ、やがて物質の束縛から解放されていきます。ですから、主のさまざまな化身の降誕について述べるこの章を、真剣に、そして熱心に読むだけで、主の誕生と行動の真相を理解できるようになります。*Vimukti*（ヴィムクティ）「解放」ということの言葉は、主の誕生と行動はすべて超越的であることをしめしています。超越的でないとしたら、読むだけで解放は達成できないはずです。この主題は神秘的であり、献愛奉仕の規定原則に従わない人々は、主の誕生と行動の神秘なる世界に入る資格は授かりません。

## 第３０節

एतद्रूपं भगवतो ह्यरूपस्य चिदात्मनः ।
मायागुणैर्विरचितं महदादिभिरात्मनि ॥ ३० ॥

エータドゥ　ルーパンム　バハガヴァトー
*etad rūpaṁ bhagavato*

ヒ　アルーパッシャ　チドゥ・アートゥマナハ
*hy arūpasya cid-ātmanaḥ*

マーヤー・グナイル　ヴィラチタンム
*māyā-guṇair viracitaṁ*

マハダーディビヒル　アートゥマニ
*mahadādibhir ātmani*

*etat*—これらすべて; *rūpam*—姿; *bhagavataḥ*—主の; *hi*—確かに; *arūpasya*—物質でできた姿を持たない者の; *cit-ātmanaḥ*—超越性の; *māyā*—物質エネルギー; *guṇaiḥ*—質によって; *viracitam*—作りだされた; *mahat-ādibhiḥ*—物質要素で; *ātmani*—自己の中で。

物質界に出現する主のヴィラートゥ（virāṭ）宇宙体は想像上の概念である。知性に欠ける人々（初心者）が、主には姿があるという考えに順応できるようにとの配慮が為されている。しかしじっさいは、主は物質的な姿を持っていない。

**要旨解説**

ヴィシュヴァ・ルーパ（*viśva-rūpa*）あるいはヴィラートゥ・ルーパ（*virāṭ-rūpa*）という主の概念は、主のさまざまな化身と一緒には述べられていませんが、それは既述の化身はすべて超越的であり、その化身の体は物質的な観念を超越しているからです。条件づけられた魂の体とは違い、主の化身の「体と自己」に違いはありません。ヴィラートゥ・ルーパは初心の崇拝者に知覚できる姿です。初心者のためにヴィラートゥ・ルーパがしめされるのであり、そのことは本書の第２編でも説明されています。ヴィラートゥ・ルーパのなかのさまざまな惑星の物質的表われは、主の足や手などとして描写されています。これらはどれも初心者のための説明です。初心者は物質を超えたものを知覚することができません。主に関する物質的な概念は、主の真実の姿のリストには含まれていません。主は、パラマートマー・至高の魂として、すべての物質の姿や原子のなかにでさえいますが、外側の物質的姿は主にとっても生命体にとっても想像の産物です。束縛された魂が持っている現在の姿は真実ではありません。結論として、主のヴィラートゥの体に関する物質的概念は想像されたものだと言うことができます。主と生命体は双方とも命を持つ精神魂であり、本来の精神的な体を持っています。

**第３１節**

यथा नभसि मेघौघो रेणुर्वा पार्थिवोऽनिले ।
एवं द्रष्टरि दृश्यत्वमारोपितमबुद्धिभिः ॥ ३१ ॥

ヤタハー　ナバハシ　メーガハウゴホー
*yathā nabhasi meghaugho*

レーヌル　ヴァー　パールティヴォー　ニレー
*reṇur vā pārthivo 'nile*

エーヴァンム　ドゥラシュタリ　ドゥリッシャトゥヴァンム
*evaṁ draṣṭari dṛśyatvam*

アーローピタンム　アブッデヒイビヒヒ
*āropitam abuddhibhiḥ*

*yathā*—ありのままに; *nabhasi*—空の; *megha-oghaḥ*—雲のかたまり; *reṇuḥ*—埃; *vā*—同様に; *pārthivaḥ*—濁り; *anile*—空気の; *evam*—そのように; *draṣṭari*—見る者にとって; *dṛśyatvam*—見る目的で; *āropitam*—埋め込こまれる; *abuddhibhiḥ*—知性に欠ける人々によって。

雲と埃は空気によって運ばれるが、知性に欠ける人々は「空が曇り、空気が汚れる」と言う。同じように、かれらは精神魂を物質的な肉体観念で見ようとする。

**要旨解説**

この節は、物質的な目や感覚では完全に精神的である主を見ることはできないという事実をさらに確証しています。私たちには、生物の肉体のなかにいる精神的火花さえ見ることができません。生命体の外側を包んでいる肉体や希薄な心を見ることはできても、体内にいる精神的火花を見ることはできません。だからこそ、生命体の存在を目に見える体の存在をとおして受けいれなくてはならないのです。同じように、物質的な目で主を見たいと思う人には、ヴィラートゥ・ルーパという巨大な外的姿を瞑想することが勧められています。たとえば人が車に乗ると（それは誰にも見えることですが）、車内の人物と車を同じものと誤解することがあります。大統領が専用車に乗っているのを見て、私たちは「大統領がいる」と表現しますが、それは、車と大統領を同一視した言い方です。同じように、神を見る資格もないのにすぐに神を見ようとする知性に欠ける人には（主は内にも外にも存在していますが）、主の姿としてまず巨大な物質宇宙をしめせばいいのです。空の雲と空の青さの関係を見ればもっとよくわかります。空の青さと空そのものは違いますが、空は青いもの、として見られます。しかしそれは、凡人が考える一般的な概念にすぎません。

**第３２節**

अतः परं यदव्यक्तमव्यूढगुणबृंहितम् ।
अदृष्टाश्रुतवस्तुत्वात्स जीवो यत्पुनर्भवः ॥ ३२ ॥

アタハ　パランム　ヤドゥ　アヴャクタンム
*ataḥ paraṁ yad avyaktam*

アヴューダハ・グナ・ブリンムヒタンム
*avyūḍha-guṇa-bṛṁhitam*

アドゥリシュターシュルタ・ヴァストゥトゥヴァートゥ
*adṛṣṭāśruta-vastutvāt*

サ　ジーヴォー　ヤトゥ　プナル・バハヴァハ
*sa jīvo yat punar-bhavaḥ*

*ataḥ*—この; *param*—超えた; *yat*—であるもの; *avyaktam*—未現の; *avyūḍha*—姿としての形を持たない; *guṇa-bṛṁhitam*—その質に影響されて; *adṛṣṭa*—見ることができない; *aśruta*—聞くことができない; *vastutvāt*—そのような状態で; *saḥ*—それ; *jīvaḥ*—生命体; *yat*—であるもの; *punaḥ-bhavaḥ*—何度も誕生を繰りかえす。

濃密な肉体の概念を超えた次元に、姿や形のない、見ることも聞くこともできない、そして未現の希薄な体の概念がある。生命体は、この希薄な状態を超えた姿を持っている。そうでなければ、誕生を繰りかえすことはできないはずである

**要旨解説**

濃密な物質でできた宇宙現象界が主の巨大な体として考えられるように、主の希薄な姿があり、それは見ることも聞くこともできず、表わされてもいません。しかしじっさいは、肉体に関する濃密・希薄という概念は生命体だけに当てはまります。生命体は、濃密かつ希薄な霊的存在を超えた自分本来の精神的姿を持っています。濃密な体と霊的な機能は、生命体が目に見える肉体を去るときに停止します。じっさい、目に見えなくなったり、声も音も聞こえなくなったりするとき、「その生命は逝ってしまった」と表現されます。熟睡している人の場合、体が動いていなくても、呼吸をしているのを見れば、生命体が体内にいることがわかります。ですから、生命体が体から出てしまうとしても、そのことから「命を持つ魂は存在していない」と結論づけることはできません。存在するはずです。そうでなければ、魂が誕生を繰りかえすはずがありません。

主は超越的な姿で永遠に存在し、その姿は生物が持っているような濃密・希薄な体とはまったく違います。それが結論です。主の体と生物の濃密・希薄な体を比べることはできません。生物の体と神の体を比べる概念は想像の産物です。生命体は自分本来の永遠で精神的な姿を持っているのですが、いまは物質的な穢れのために条件づけられています。

**第３３節**

यत्रेमे सदसद्रूपे प्रतिषिद्धे स्वसंविदा ।
अविद्ययात्मनि कृते इति तद्ब्रह्मदर्शनम् ॥ ३३ ॥

ヤトゥレーメー　サドゥ・アサドゥ・ルーペー
*yatreme sad-asad-rūpe*
　プラティシッデヘー　スヴァ・サンヴィダー
　*pratiṣiddhe sva-saṁvidā*
アヴィデャヤートゥマニ　クリテー
*avidyayātmani kṛte*
　イティ　タドゥ　ブラフマ・ダルシャナンム
　*iti tad brahma-darśanam*

*yatra*—そのときにはいつでも; *ime*—これらすべての中に; *sat-asat*—濃密と希薄; *rūpe*—〜の姿で; *pratiṣiddhe*—無力にされて; *sva-saṁvidā*—自己を悟ることで; *avidyayā*—無知によって; *ātmani*—自己のうちに; *kṛte*—強いられて; *iti*—そうして; *tat*—それが〜である; *brahma-darśanam*—絶対者を見る方法。

自己を悟った結果、濃密・希薄な体は純粋な自己とは一切関係がないことを会得する人物は、そのときに、主も自分も見ることができる。

**要旨解説**

自己の悟りと幻想の違いは、「濃密・希薄な体として現われている物質の力の一時的で幻の表われは、魂を包む覆いである」と悟ることにあります。その覆いは無知ゆえに起こります。しかし、人格主神という人物がそのような覆いに包まれることはありません。この事実に確固たる信念を持つことが解放、すなわち絶対真理者を見る境地です。これは「完璧な自己の悟りは神聖な精神生活によって達成できる」ということです。自己の悟りとは、濃密・希薄な肉体が要求することに乱されず、自分本来の活動に真剣に打ちこむことにあります。行動しようとする衝動は自己から湧きおこりますが、自己の本来の境地を知らなければ幻惑された行動として表われます。無知に包まれた自己の関心は濃密・希薄な体によって決定されるため、なにをしても、無益な行動を幾生涯も繰りかえす結果になります。しかし、正しい教育を受けて自己が見つめられるようになったとき、本来の自分の活動が始まります。ですから、自己の活動に励んでいる人をジーヴァン・ムクタ（*jīvan-mukta*）「制約された環境においても解放されている人物」といいます。

この完璧な自己の悟りの境地は、不自然な方法に頼るのではなく、つねに超越的な方である主の蓮華の御足にすがってこそ到達できるものです。『バガヴァッド・ギーター』で主は、「わたしはすべての生物の心にいる、そしてわたしだけからすべての知識、記憶、忘却が発生する」

と言っています。生命体が物質の力（妄想の世界）を楽しみたいと思うと、主はその生命体を「忘却」という神秘的な力で包み、やがてその生命体は濃密・希薄な体をほんとうの自分だと思いこむようになります。そしてその生命体は、超越的知識を理解するにつれ、忘却という足かせから逃れられるよう主に祈るようになります。主はいわれのない慈悲をしめし、幻想のカーテンを取りのぞき、やがてその生命体はほんとうの自己を悟ることができます。その境地に入った生命体は、永遠で自分本来の境地のなかで主への奉仕に励むようになり、束縛された生活から自由になっていきます。これはすべて、主がみずからの外的力を使うか、あるいはじかに内的力を使っておこなわれます。

### 第３４節

यद्येषोपरता देवी माया वैशारदी मतिः ।
सम्पन्न एवेति विदुर्महिम्नि स्वे महीयते ॥ ३४ ॥

ヤディ　エーショーパラター　デーヴィー
*yady eṣoparatā devī*

マーヤー　ヴァイシャーラディー　マティヒ
*māyā vaiśāradī matiḥ*

サンパンナ　エヴェーティ　ヴィドゥル
*sampanna eveti vidur*

マヒンムニ　スヴェー　マヒーヤテー
*mahimni sve mahīyate*

*yadi*—もし、しかし; *eṣā*—彼ら; *uparatā*—静まる; *devī māyā*—幻想の力; *vaiśāradī*—知識に満ちあふれ; *matiḥ*—悟り; *sampannaḥ*—～で満たされる; *eva*—確かに; *iti*—こうして; *viduḥ*—～を認識して; *mahimni*—栄光の中で; *sve*—自己の; *mahīyate*—～に立脚して。

幻想の力が静まり、主の恩寵によって完全に知識に満たされた生命体は、自己の悟りをとおしてただちに啓発され、栄光ある自分本来の境地に立脚する。

### 要旨解説

主は絶対的かつ超越的な方ですから、主の姿・名前・超越的な娯楽・質・親交者・力はすべて主と同じです。主の崇高な力は、主の全能の力に従って作用します。それは、外的・内的・中間の力として作用し、また主は全能の力を使ってその力をとおしてどのようなことでもできます。

みずからの意志で外的力を内的力に変えることもできます。ですから、もともと生命体を眩惑させるために存在し（そして生命体も求めている）幻想の力は、条件づけられた魂が後悔と改悛をすれば、主の恩寵によってその力が弱まっていきます。そしてその同じ力は、純粋になった心を持つ生命体が自己の悟りの道を歩けるよう助けてくれます。この関係がよくわかる「電気」の例があります。高度な技術を持つ電気技師は、電気を調節するだけで加熱と冷却両方に使いわけることができます。同じように、いまは生命体を誕生と死の循環に陥れようとしている外的力が、生命体を永遠な生活に導くために、主の意志で内的力に変化していきます。こうして生命体が主の恩寵を授かるとき、本来の正しい立場に置かれ、永遠の精神生活を満喫できるようになります。

## 第３５節

एवं जन्मानि कर्माणि ह्यकर्तुरजनस्य च ।
वर्णयन्ति स्म कवयो वेदगुह्यानि हृत्पतेः ॥ ३५ ॥

エーヴァンム　ジャンマーニ　カルマーニ
*evaṁ janmāni karmāṇi*

ヒ　アカルトゥル　アジャナッシャ　チャ
*hy akartur ajanasya ca*

ヴァルナヤンティ　スマ　カヴァヨー
*varṇayanti sma kavayo*

ヴェーダ・グヒャーニ　フリトゥ・パテーヘ
*veda-guhyāni hṛt-pateḥ*

*evam*—このように; *janmāni*—誕生; *karmāṇi*—活動; *hi*—確かに; *akartuḥ*—行動しない者の; *ajanasya*—誕生しない者の; *ca*—そして; *varṇayanti*—記述する; *sma*—過去の; *kavayaḥ*—博識者; *veda-guhyāni*—ヴェーダの中には見つけられない; *hṛt-pateḥ*—心の主。

このように、博識な人々は、誕生することのない主の誕生について、活動することのない主の活動について説明する。その教えはヴェーダ経典にでさえ見つけられない。主は心の主人である。

### 要旨解説

主と生命体は本来精神的な存在です。永遠で、生まれも死にもしません。違いは、主と生命体の誕生と他界の中味が違う、という点にあります。誕生し、死んでいく生命体は物質自然の

法則に縛られています。しかし主の誕生と他界は、物質自然の作用によるものではなく、主の内的力が働いている証拠です。偉大な聖者たちは、人々が自己を悟ることができるようにこの主題について説明しています。『バガヴァッド・ギーター』では主みずから、物質界での主の誕生と活動はすべて超越的であると述べています。そして、そのような活動を深く瞑想するだけで、私たちはブラフマンの悟りに達し、やがて物質的束縛から救われます。シュルティ・マントラには「誕生しない者が誕生しているかのように見える」と述べられています。主にはすべきことはなにもありませんが、主は全能であり、すべてが主によって自然に為されているため、すべてが自動的に起こっているように見えます。しかしじっさいは、至高人格主神の出現と他界、そして活動はだれにも理解できないものばかりであり、ヴェーダ経典にでさえ明かされていません。それでも主は条件づけられた魂に慈悲をそそぐために、超越的な誕生と活動を繰りひろげます。私たちは、いつも主の活動について聞き、よく理解しなくてはなりません。それは、もっともかんたんで、甘露に満ちたブラフマンの瞑想でもあります。

### 第３６節

स वा इदं विश्वममोघलीलः
सृजत्यवत्यत्ति न सज्जतेऽस्मिन् ।
भूतेषु चान्तर्हित आत्मतन्त्रः
षाड्वर्गिकं जिघ्रति षड्गुणेशः ॥ ३६ ॥

サ　ヴァー　イダンム　ヴィシュヴァンム　アモーガハ・リーラーハ
*sa vā idaṁ viśvam amogha-līlaḥ*

スリジャティ　アヴァティ　アッティ　ナ　サッジャテー　スミン
*sṛjaty avaty atti na sajjate 'smin*

ブフーテーシュ　チャーンタルヒタ　アートゥマ・タントゥラハ
*bhūteṣu cāntarhita ātma-tantraḥ*

シャードゥ・ヴァルギカンム　ジグフラティ　シャドゥ・グネーシャハ
*ṣāḍ-vargikaṁ jighrati ṣaḍ-guṇeśaḥ*

*saḥ*—至高主; *vā*—交互に; *idam*—この; *viśvam*—表わされた宇宙; *amogha-līlaḥ*—無垢な行動をする者; *sṛjati*—創造する; *avati atti*—維持し、破壊する; *na*—ではない; *sajjate*—〜に影響される; *asmin*—それらの中に; *bhūteṣu*—全生物の中の; *ca*—もまた; *antarhitaḥ*—内に住んでいる; *ātma-tantraḥ*—自己自立; *ṣāṭ-vargikam*—主の富の力すべてに恵まれている; *jighrati*—表面に付着して、香りを嗅ぐような; *ṣaṭ-guṇa-īśaḥ*—６つの感覚の主人。

つねに純粋な活動をする主は、６つの感覚の主人であり、６つの財富を完全にそなえた全能者である。物質宇宙を創造し、維持し、破壊し、その行為にいささかも影響されることはない。主はすべての生命体の内に住み、なにものにも依存しない方である。

**要旨解説**

主と生命体のおもな違いは、主が創造者であり、生命体は創造された者、という点にあります。この節で主は（*amogha-līlaḥ*・アモーガハ・リーラハ）と呼ばれていますが、それは主の創造のなかに悲嘆すべきものはなにもない、という意味がこめられています。主の創造界のなかで混乱を起こす者たちは、自分たちが混乱させられます。主はすべての物質的な苦しみを超越しています。なぜなら主は、富・力・名声・美しさ・知識・放棄心という財富を完全にそなえた方であり、ゆえに感覚の主人だからです。主は宇宙を創造し、その宇宙のなかで三重苦に苦しめられている生命体たちを改心させますが、宇宙を維持し、そしてやがて消滅させる行為に影響されることはありません。主は物質創造界と表面的にかかわっていますが、それは、香りを放つ物体に鼻を付けずに香りを嗅ぐようなものです。ですから、神聖な質を持たない者は、どれほど努力しても主に近づくことはできません。

**第３７節**

न चास्य कश्चिन्निपुणेन धातु-
रवैति जन्तुः कुमनीष ऊतीः ।
नामानि रूपाणि मनोवचोभिः
सन्तन्वतो नटचर्यामिवाज्ञः ॥ ३७ ॥

ナ　チャーッシャ　カシュチン　ニプネーナ　ダハートゥル
*na cāsya kaścin nipuṇena dhātur*

アヴァイティ　ジャントゥフ　クマニーシャ　ウーティーヒ
*avaiti jantuḥ kumanīṣa ūtīḥ*

ナーマーニ　ルーパーニ　マノー・ヴァチョービヒヒ
*nāmāni rūpāṇi mano-vacobhiḥ*

サンタンヴァトー　ナタ・チャリャーンム　イヴァーギャハ
*santanvato naṭa-caryām ivājñaḥ*

*na*—ではない; *ca*—そして; *asya*—主の; *kaścit*—だれでも; *nipuṇena*—手腕によって; *dhātuḥ*—創造者の; *avaiti*—知ることができる; *jantuḥ*—生命体; *kumanīṣaḥ*—貧弱な知識を使って; *ūtīḥ*—主の活動; *nāmāni*—主の名前; *rūpāṇi*—主の姿; *manaḥ-vacobhiḥ*—思索の力によって、あるいは言葉の力によって; *santanvataḥ*—示している; *naṭa-caryām*—芝居がかった行動; *iva*—のような; *ajñaḥ*—愚かな者。

あたかも芝居の役者のようにふるまう主の姿・名前・行動は、知識の乏しい愚かな者には理解できない。また、そのようなことを想像することも、言葉で描写することもできない。

**要旨解説**

だれも絶対真理者の超越的な本質を正しく述べることはできません。そのため、主は「頭脳と言葉を超えた方」と表現されます。それでも、知識に欠ける人々は、主の活動について不完全な空想をしてみたり、まちがった説明をしたりしています。一般人にとって、主の活動・降誕・他界・名前・姿・身の回りの品々・人格、そして主にまつわる物事はどれも神秘のベールに包まれています。物質主義者には、結果だけを求めて働く者と経験にもとづいて哲学を論じる者という２種類がいます。前者は絶対真理者についてなにも知りません。そして推論家も、果報的活動に挫折したあと絶対真理に関心をしめし、推論を始めます。このような人々にとって絶対真理者は摩訶不思議な存在でしかなく、子どもには奇術師の手品が謎に包まれているのと同じです。至高の生物の手品に惑わされている不信心な人々は、結果に囚われた活動や推論を巧みにこなしても、いつも無知のなかにいます。そのような限られた知識しかないかれらには、神秘的で超越的な領域に入ることはできません。推論家は、愚鈍な物質主義者や果報的活動者よりは高い意識を持っているかもしれませんが、幻想の力に縛られているために、「姿があり、名前を持ち、そして活動する者は物質エネルギーの産物である」と当たりまえのように考えています。かれらにとって、至高の精神魂には姿も名前もなく、活動もありません。また推論家は、主の超越的な名前と姿をふつうの名前や姿と同じ次元で考えるために、じつは無知のなかにいます。そのような貧弱な知識では、至高の生物の本質を理解することはできません。『バガヴァッド・ギーター』で述べられているように、主はつねに超越的な境地にあり、それは主が物質界にいるときにもあてはまります。しかし無知な人々は、主のことを世界に誕生した一人の偉人として考え、こうして幻想エネルギーに間違って導かれているのです。

## 第３８節

स वेद धातुः पदवीं परस्य
　　दुरन्तवीर्यस्य रथाङ्गपाणेः ।
योऽमायया सन्ततयानुवृत्त्या
　　भजेत तत्पादसरोजगन्धम् ॥ ३८ ॥

サ　ヴェーダ　ダハートゥフ　パダヴィーンム　パラッシャ
*sa veda dhātuḥ padavīṁ parasya*

ドゥランタ・ヴィーリャッシャ　ラタハーンガ・パーネーヘ
*duranta-vīryasya rathāṅga-pāṇeḥ*

*yo 'māyayā santatayānuvṛttyā*

バハジェータ　タトゥ・パーダ・サロージャ・ガンダハンム
*bhajeta tat-pāda-saroja-gandham*

*saḥ*—彼だけが; *veda*—知ることができる; *dhātuḥ*—創造者の; *padavīm*—栄光; *parasya*—超越性の; *duranta-vīryasya*—偉大な力を持つ方の; *ratha-aṅga-pāṇeḥ*—主クリシュナ、手に馬車の輪を持つ方の; *yaḥ*—である方; *amāyayā*—無条件で; *santatayā*—中断することなく; *anuvṛttyā*—好意的に; *bhajeta*—奉仕をする; *tat-pāda*—主の蓮華の御足の; *saroja-gandham*—蓮華の花の香り。

車輪を手に持つ主クリシュナの蓮華の御足に、無条件で、途切れることのない、そして好意的な奉仕をする者たちだけが、完全な栄光・力・超越性を持つ宇宙の創造者を知ることができる。

### 要旨解説

結果だけを求める活動や心の推論から生じる反動に無縁の純粋な献愛者だけが、主クリシュナの超越的な名前・姿・活動を知ることできます。心の清い献愛者は主に純粋な奉仕をするため、仕えることで個人的な利益を授かろうとする望みはありません。ごく自然に、無条件の奉仕をつづけます。主の創造世界にいる生物はすべて、間接・直接に主に奉仕をしています。この主の法則に当てはまらない人はだれもいません。間接的に仕えている人々は、主の幻想の力に強いられながら、不本意に奉仕をしています。いっぽう、主に愛されている代表者に導かれて直接主に奉仕をしている人々は、好意的に奉仕をしています。そのような好意的な召使いが主の献愛者であり、主の恩寵と慈悲を授かって、崇高かつ神秘的な境地に入ることができます。

しかし、推論だけに頼る人々はいつも暗闇のなかにいます。『バガヴァッド・ギーター』が説くように、主は純粋な献愛者を悟りの道へ導きます。かれらが自発的な思いから主にたえまない愛情奉仕をしているからです。それが神の国に入っていく秘訣です。果報的活動者や推論者には、その国に入る資格はありません。

**第３９節**

अथेह धन्या भगवन्त इत्थं
यद्वासुदेवेऽखिललोकनाथे ।
कुर्वन्ति सर्वात्मकमात्मभावं
न यत्र भूयः परिवर्त उग्रः ॥ ३९ ॥

アテヘーハ　ダハニャー　バハガヴァンタ　イッタハンム
*atheha dhanyā bhagavanta itthaṁ*

ヤドゥ　ヴァースデーヴェー　キヒラ・ローカ・ナーテヘー
*yad vāsudeve 'khila-loka-nāthe*

クルヴァンティ　サルヴァートゥマカンム　アートゥマ・バハーヴァンム
*kurvanti sarvātmakam ātma-bhāvaṁ*

ナ　ヤトゥラ　ブフーヤハ　パリヴァルタ　ウグラハ
*na yatra bhūyaḥ parivarta ugraḥ*

*atha*—このように; *iha*—この世界で; *dhanyāḥ*—成功する; *bhagavantaḥ*—完璧に認識する; *ittham*—そのような; *yat*—であるもの; *vāsudeve*—人格主神に; *akhila*—すべてを包括する; *loka-nāthe*—全宇宙の所有者に; *kurvanti*—起こさせる; *sarva-ātmakam*—100 パーセント; *ātma*—精神魂; *bhāvam*—法悦心; *na*—決してない; *yatra*—そこで; *bhūyaḥ*—再び; *parivartaḥ*—繰りかえし; *ugraḥ*—恐ろしい。

この世界では、そのような質問をするだけで人生を成功させ、すべてを認識できるようになる。なぜなら、その質問によって全宇宙の所有者である人格主神への超越的かつ法悦的愛情が目覚め、恐ろしい誕生と死の繰りかえしからの完全な解放が保証されるからである。

**要旨解説**

シャウナカを筆頭とする聖者たちの質問は、ここでスータ・ゴースヴァーミーによって、その超越的質ゆえに讃えられています。すでに断言されたように、主の献愛者だけが主を幅広く

理解でき、ほかの人々に主のことはわかりません。献愛者は精神的知識をすべて完璧に認識しています。「人格主神」は絶対真理者を表現する究極の言葉です。非人格的ブラフマンと局所的パラマートマー（至高の魂）は人格主神の知識に含まれます。ゆえに、人格主神を知る人は、主に関するすべて、主の全能の力、主の拡張体などを理解できるようになります。また、献愛者はあらゆる面で成功した人物として祝福されます。主の完全な献愛者は、誕生と死という恐ろしい物質的苦悩に苦しめられることはありません。

**第４０節**

इदं भागवतं नाम पुराणं ब्रह्मसम्मितम् ।
उत्तमश्लोकचरितं चकार भगवानृषिः ।
निःश्रेयसाय लोकस्य धन्यं स्वस्त्ययनं महत् ॥ ४० ॥

イダンム　バハーガヴァタンム　ナーマ
*idaṁ bhāgavataṁ nāma*

プラーナンム　ブラフマ・サンミタンム
*purāṇaṁ brahma-sammitam*

ウッタマ・シュローカ・チャリタンム
*uttama-śloka-caritaṁ*

チャカーラ　バハガヴァーン　リシヒ
*cakāra bhagavān ṛṣiḥ*

ニフシュレーヤサーヤ　ローカッシャ
*niḥśreyasāya lokasya*

ダハニャンム　スヴァスティ・アヤナンム　マハトゥ
*dhanyaṁ svasty-ayanaṁ mahat*

*idam*—この; *bhāgavatam*—人格主神と、その純粋な献愛者に関する記述を含む書物; *nāma*—その名前の; *purāṇam*—ヴェーダの補足; *brahma-sammitam*—主シュリー・クリシュナの化身; *uttama-śloka*—人格主神; *caritam*—活動; *cakāra*—編纂された; *bhagavān*—人格主神の化身; *ṛṣiḥ*—シュリー・ヴャーサデーヴァ; *niḥśreyasāya*—究極の善のために; *lokasya*—すべての人々の; *dhanyam*—すべての面で成功して; *svasti-ayanam*—すべての面で至福に満ちあふれて; *mahat*—すべての面で完璧な。

この『シュリーマド・バーガヴァタム』は、神の文学の化身であり、シュリーラ・ヴャーサデーヴァによって編纂された。この書物は万民の究極の幸福のためにあり、あらゆる面で成功し、あらゆる面で至福に満ち、あらゆる面で完璧である。

**要旨解説**

主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは、『シュリーマド・バーガヴァタム』をヴェーダの全知識と歴史を記述した純粋な音の表われである、と宣言しました。人格主神と直接かかわりのあった偉大な献愛者たちについて、選りすぐられた歴史が記載されているのです。『シュリーマド・バーガヴァタム』は主シュリー・クリシュナの文学としての化身であり、ゆえに主と同じです。私たちが敬意をこめて主を崇拝するように、『シュリーマド・バーガヴァタム』も同じ気持ちで崇拝しなくてはなりません。そうすれば、慎重かつ忍耐強い研究をとおして主の究極の祝福を授かることができます。神が光と至福に満ち、あらゆる面で完璧な方であるように、『シュリーマド・バーガヴァタム』も同じ質に満たされています。読者は『シュリーマド・バーガヴァタム』を読むことで、至高のブラフマン、シュリー・クリシュナの超越的光に照らされますが、それは透明で無垢な精神指導者をとおして受けとる場合に限られます。主チャイタンニャの親密な秘書であるシュリーラ・スヴァルーパ・ダーモーダラ・ゴースヴァーミーは、プリーにいた主を訪ねてくる人々に対して、人物のバーガヴァタムから『シュリーマド・バーガヴァタム』を学ぶよう助言しました。人物のバーガヴァタムとは、自己を悟った正しい精神指導者のことで、望むべき結果を得るためには、その人物だけをとおして『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えを授からなくてはなりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』を研究すれば、主から直接得られるあらゆる祝福を授かることができます。この書物は、主シュリー・クリシュナの超越的祝福をすべて含んでおり、主とじかに接触して得られる同じ結果が授かります。

**第４１節**

तदिदं ग्राहयामास सुतमात्मवतां वरम् ।
सर्ववेदेतिहासानां सारं सारं समुद्धृतम् ॥ ४१ ॥

タドゥ　イダンム　グラーハヤーンム　アーサ
*tad idaṁ grāhayām āsa*

スタンム　アートゥマヴァターンム　ヴァランム
*sutam ātmavatāṁ varam*

サルヴァ・ヴェーデーティハーサーナーンム
*sarva-vedetihāsānāṁ*

サーランム　サーランム　サムッドフゥリタンム
*sāraṁ sāraṁ samuddhṛtam*

*tat*—その; *idam*—この; *grāhayām āsa*—受け入れさせた; *sutam*—我が子に; *ātmavatām*—自己の悟りの; *varam*—もっとも尊い; *sarva*—すべての; *veda*—ヴェーダ経典（知識の書物）; *itihāsānām*—すべての歴史の; *sāram*—真髄; *sāram*—真髄; *samuddhṛtam*—取り出されて。

シュリー・ヴャーサデーヴァはヴェーダ経典と宇宙の歴史のなかから真髄を抽出し、それを、自己を悟った人物のなかでもっとも尊ばれていた我が子に伝えた。

**要旨解説**

充分な知識のない人々は、仏陀が降誕した時代、つまり紀元前600年以後の歴史だけを受けいれ、経典に登場するそれ以前の歴史はどれも想像上の物語と考えています。しかし、それは違います。プラーナや『マハーバーラタ』で記述されている物語は、その内容がこの星に限らず、宇宙内の他の無数の星々にまつわる歴史であっても、すべて歴史上の事実なのです。懐疑的な人々には、この世界以外の惑星にある歴史は信じられません。しかし、さまざまな惑星の環境はどこも同じというわけではありませんから、他の惑星にある歴史的事実がこの惑星の状況には合致していない場合があります。さまざまな惑星のさまざまな環境を考慮すると、プラーナに出てくる話はとくに驚くべきことでもなく、また想像上の話でもありません。「甲の薬は乙の毒」という格言があります。ですから、プラーナの話や歴史を空想の産物と考えて無視すべきではありません。ヴャーサのような偉大なリシたちは、経典を捏造することにはかかわらないのです。

『シュリーマド・バーガヴァタム』には、さまざまな惑星の歴史から選び抜かれた歴史上の事実が記述されています。そのために、すべての精神的権威者からマハー・プラーナ（*Mahā-Purāṇa*）として認められています。この歴史の特筆すべき重要性は、それらの歴史的出来事がさまざまな時代や環境において主と関係がある、という点にあります。シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、自己を悟った人物のなかでも筆頭の人物であり、このことを父ヴャーサデーヴァから学問の対象として学びました。シュリーラ・ヴャーサデーヴァは偉大な権威者であり、『シュリーマド・バーガヴァタム』の主題がひじょうに重要であるこ

とから、内容を我が子シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに伝えました。この書物の内容は牛乳のクリームにたとえられます。ヴェーダ経典は、知識にあふれた牛乳の海のような存在です。クリームあるいはバターは牛乳から得られるもっとも美味なエッセンスですが、主と主の献愛者のさまざまな活動が記され、また人々を啓蒙する権威ある『シュリーマド・バーガヴァタム』も、まさに同じ甘露を含んでいます。しかし、『シュリーマド・バーガヴァタム』のメッセージを、その内容を信じていない者たちや無神論者から、あるいは俗人のために『シュリーマド・バーガヴァタム』を語って商売にしている職業吟唱家たちから学んでも利益はなにも得られません。この教えはシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが伝えたものであり、利益追求とはまったく関係ありませんし、まして商売をして家族を養う必要などありませんでした。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』は、シュカデーヴァの代表者から学ぶべきであり、またその代表は家族を養う義務のない放棄階級の人物でなくてはなりません。牛乳はもちろん美味で栄養豊富な食品ですが、蛇の口が触れた牛乳には栄養どころか、死をもたらすことさえあります。同じように、ヴァイシュナヴァの原則に厳格に従っていない者たちは、この『シュリーマド・バーガヴァタム』を商売道具にして、多くの読者を精神的死に追いやってはなりません。『バガヴァッド・ギーター』で主は、すべてのヴェーダの目的は主（主クリシュナ）を知るためにあると述べ、また『シュリーマド・バーガヴァタム』は「記録された知識」という姿の主シュリー・クリシュナ人格主神です。ですから、本書はすべてのヴェーダのクリーム（真髄）であり、シュリー・クリシュナに関連するあらゆる時代のあらゆる歴史的事実を含んでいます。まさに、すべての歴史の真髄をまとめた書物なのです。

## 第４２節

स तु संश्रावयामास महाराजं परीक्षितम् ।
प्रायोपविष्टं ग्ङ्गायां परीतं परमर्षिभिः ॥ ४२ ॥

サ　トゥ　サンムシュラーヴァヤーンム　アーサ
*sa tu saṁśrāvayām āsa*

マハーラージャンム　パリークシタンム
*mahārājaṁ parīkṣitam*

プラーヨーパヴィシュタンム　ガンガーヤーンム
*prāyopaviṣṭaṁ gaṅgāyāṁ*

パリータンム　パラマリシビヒヒ
*parītaṁ paramarṣibhiḥ*

*saḥ*—ヴャーサデーヴァの子; *tu*—再び; *saṁśrāvayām āsa*—それらを聞けるようにする; *mahā-rājam*—皇帝に; *parīkṣitam*—パリークシットという名の; *prāya-upaviṣṭam*—食糧や飲み物を摂取せずに死ぬまで座った人物; *gaṅgāyām*—ガンジス川の岸辺で; *parītam*—囲まれて; *parama-ṛṣibhiḥ*—偉大な聖者達によって。

ヴャーサデーヴァの子、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、次にこの『シュリーマド・バーガヴァタム』を偉大な皇帝パリークシットに伝えた。皇帝は、ガンジス川の岸辺で聖者たちに囲まれ、食べることも飲むこともやめて死を待っていた。

**要旨解説**

すべての超越的なメッセージは師弟継承の鎖をとおして正しく受け継がれます。これがパランパラー（*paramparā*）「師弟継承」です。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』であろうと他のヴェーダ経典であろうと、このパランパラーというつながりから学ばなければ、知識は正しく伝わりません。ヴャーサデーヴァはシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに内容を伝え、同じ内容がシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーからスータ・ゴースヴァーミーに受けつがれました。ですから、『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えをスータ・ゴースヴァーミー、あるいはその代表者から受けいれるべきであり、他の不適切な解釈を受けいれてはなりません。

パリークシット皇帝は自分がまもなく死ぬことを知り、すぐに王国と家族を後にしてガンジス川の岸辺に座って死ぬまで絶食する決意でいました。すべての偉大な聖者、リシ、哲学者、神秘家たちも、パリークシットが皇帝であったことから、その場に集まってきました。かれらは、皇帝がさしあたって何をすべきかについて多くの助言をしましたが、最後に、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから主クリシュナについて聞くことが決まりました。このようにして『シュリーマド・バーガヴァタム』がパリークシット皇帝に語られることになったのです。

マーヤーヴァーダ哲学を説き、姿や形のない絶対真理者の悟りを強調したシュリーパーダ・シャンカラーチャーリャも、「議論からは何も得られない、だから主クリシュナの蓮華の御足に身をゆだねよ」、と説きました。シュリーパーダ・シャンカラーチャーリャは、『ヴェーダンタ・スートラ』について美辞麗句を並べた文法的な解釈は、死ぬときにはまったく役に立たないことを間接的に認めたということです。死という極限状態において、私たちはゴーヴィンダの名前を唱えなくてはなりません。これが、すべての偉大な超越主義者たちからの助言です。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、死ぬときにナーラーヤナの名前を唱えるという同じ真理を遠い昔から教えています。それがすべての精神的活動の最重要点です。この永遠の真理に

のっとって、『シュリーマド・バーガヴァタム』は有能なシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られ、パリークシット皇帝によって聞かれました。『シュリーマド・バーガヴァタム』のメッセージの語り手と受け手双方が、同じ媒体をとおして確実に救われるのです。

### 第４３節

कृष्णे स्वधामोपगते धर्मज्ञानादिभिः सह ।
कलौ नष्टदृशामेष पुराणार्कोऽधुनोदितः ॥ ४३ ॥

クリシュネー　スヴァ・ダハーモーパガテー
*kṛṣṇe sva-dhāmopagate*

ダハルマ・ギャーナーディビヒヒ　サハ
*dharma-jñānādibhiḥ saha*

カラウ　ナシュタ・ドゥリシャーンム　エーシャ
*kalau naṣṭa-dṛśām eṣa*

プラーナールコー　ドフゥノーディタハ
*purāṇārko 'dhunoditaḥ*

*kṛṣṇe*—クリシュナの; *sva-dhāma*—みずからの住居; *upagate*—戻って; *dharma*—宗教; *jñāna*—知識; *ādibhiḥ*—一緒になって; *saha*—〜と一緒に; *kalau*—カリ・ユガにおいて; *naṣṭa-dṛśām*—自分の視力を失った人々の; *eṣaḥ*—これらすべて; *purāṇa-arkaḥ*—太陽のように光輝くプラーナ; *adhunā*—ちょうど今; *uditaḥ*—昇った。

このバーガヴァタ・プラーナは太陽のようにまばゆくきらめき、主クリシュナが宗教と知識を伴ってみずからの住居に去っていった直後にその姿を現わした。カリ時代の無知という暗闇のために視力を失った人々は、このプラーナから光を得ることができるだろう。

### 要旨解説

主シュリー・クリシュナは自分の永遠なダーマ（*dhāma*）「住居」を持っており、永遠な親交者やさまざまな身の回りの品々とともにその世界を楽しんでいます。その永遠な住居は主の内的力の現われであり、物質界は外的力の現われです。主は物質界に降誕するとき、内的力のなかであらゆる品々とともにみずからを表わし、それはアートゥマ・マーヤー（*ātma-māyā*）と呼ばれています。『バガヴァッド・ギーター』で主は、自分の力（アートマ・マーヤー）によって降誕する、と言います。ゆえに主の姿・名前・名声・身の回りの品々・住居などは物質ではあり

ません。主は、堕落した魂たちを呼びもどすために、そして主によって直接定められた宗教法典を再構築するために降誕します。神以外に、宗教原則を定める者はいません。主、あるいは主から力を授かった適切な人物が宗教原則を決定することができます。真の宗教とは、神を知ること、主との関係を知ること、その関係にもとづく義務を知ること、そして最後に物質の体を去ったあとに行く場所を知ることです。物質エネルギーに縛られている条件づけられた魂は、この原則についてほとんど知りません。ほとんどの人々が、動物のように食べたり、眠ったり、恐れたり、子孫を増やすために生きています。宗教、知識、解放の名のもとで感覚満足にふけっているのです。また、争いの時代・カリ・ユガの悪影響で精神的視野はさらに失われています。カリ・ユガに生きる人々は、さしずめ王の格好をした動物といえましょう。精神的知識にも信心深い宗教生活にも無縁の生活をしています。また、希薄な心・知性・自我の範囲を超えたものは何も見ることができないほど視力を失っていますが、発達した知識、科学、物質的繁栄をたいへん誇りに思っています。しかし、いまの肉体を去ったあとに犬や豚の体に入る危険を顧みることもありません。人生の究極目標を完全に見失っているからです。人格主神シュリー・クリシュナは、カリ・ユガが始まる直前に降誕し、カリ・ユガが始まったと同時にみずからの永遠なふるさとに戻っていきました。主が地上にいたとき、さまざまな活動をとおして私たちにすべてをしめしました。とくに『バガヴァッド・ギーター』を語り、偽りの宗教原則をすべて根絶しています。そして物質界を去るまえに、ナーラダを介してシュリー・ヴャーサデーヴァに力を授け、『シュリーマド・バーガヴァタム』の情報を編纂させ、こうして『バガヴァッド・ギーター』と『シュリーマド・バーガヴァタム』は、正しく物事を見る目を失ってしまった現代人に「明かりをかざす」存在となりました。言いかえれば、カリ時代に生きる人々が人生のほんとうの光を見ようと望むならば、この２冊の本だけを信頼すれば人生の目標は達成される、ということです。『バガヴァッド・ギーター』は『シュリーマド・バーガヴァタム』の予備学習であり、『シュリーマド・バーガヴァタム』は至高善・主シュリー・クリシュナの権化です。ですから私たちは『シュリーマド・バーガヴァタム』を、主クリシュナを直接代表する書物として受けいれなくてはなりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』の本質を見ることのできる人は、主シュリー・クリシュナその方を見ることができます。双方に違いはないからです。

### 第４４節

तत्र कीर्तयतो विप्रा विप्रर्षेर्भूरितेजसः ।
अहं चाध्यगमं तत्र निविष्टस्तदनुग्रहात् ।
सोऽहं वः श्रावयिष्यामि यथाधीतं यथामति ॥ ४४ ॥

タトゥラ　キールタヤトー　ヴィプラー
*tatra kīrtayato viprā*

ヴィプラルシェール　ブフーリ・テージャサハ
*viprarṣer bhūri-tejasaḥ*

アハンム　チャーデャガマンム　タトゥラ
*ahaṁ cādhyagamaṁ tatra*

ニヴィシュタス　タドゥ・アヌグラハートゥ
*niviṣṭas tad-anugrahāt*

ソー　ハンム　ヴァハ　シュラーヴァイッシャーミ
*so 'haṁ vaḥ śrāvayiṣyāmi*

ヤタハーデヒィータンム　ヤタハー・マティ
*yathādhītaṁ yathā-mati*

*tatra*—そこで; *kīrtayataḥ*—語っているあいだ; *viprāḥ*—ブラーフマナ達よ; *vipra-ṛṣeḥ*—その偉大なブラーフマナ・リシから; *bhūri*—素晴らしく; *tejasaḥ*—力強い; *aham*—私; *ca*—もまた; *adhyagamam*—理解できた; *tatra*—その集まりの中で; *niviṣṭaḥ*—完璧に集中して; *tat-anugrahāt*—彼の慈悲で; *saḥ*—まさにそのこと; *aham*—私; *vaḥ*—皆さんに; *śrāvayiṣyāmi*—聞いていただきたい; *yathā-adhītam yathā-mati*—私の悟りが及ぶ限り。

博識なるブラーフマナたちよ。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーがそこで（パリークシット皇帝がいたとき）『シュリーマド・バーガヴァタム』を語ったとき、私は全身全霊を傾けてその話を聞き、偉大で精神的力みなぎるシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの慈悲によって『シュリーマド・バーガヴァタム』を学ぶことができた。では、これから、私がシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから聞き、そして悟った同じことを、皆さんに聞いていただきたいと思う。

**要旨解説**

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような自己を悟った偉大な魂から『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞けば、まちがいなくこの書物をめくるたびに主シュリー・クリシュナの存在を直接見ることができます。しかし、『シュリーマド・バーガヴァタム』を語ってお金を稼ぎ、そのお金を使って性欲を満たすような雇われた贋物吟唱家からは、ぜったいに学ぶことはできません。性生活に没頭している人間たちとかかわっている人は『シュリーマド・バーガヴァタム』を学ぶことはできません。これが『シュリーマド・バーガヴァタム』を学ぶ秘訣です。また、俗な学識を使って『シュリーマド・バーガヴァタム』を解釈する人間からも学ぶことは

できません。主シュリー・クリシュナをこの書物のなかに見出したいのであれば、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの代表者から学ぶべきであり、それ以外の人物から学んではなりません。それが正しい方法であり、それ以外の方法はありません。スータ・ゴースヴァーミーは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーという偉大で博学なブラーフマナから授かったメッセージを語ることを望んでいる人物であるため、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの正しい代表者といえます。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは偉大な父親から『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞き、スータ・ゴースヴァーミーも、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから聞いたとおりに語ろうとしました。ただ聞くだけでは不充分です。正しく傾聴して、内容を理解しなくてはなりません。*Niviṣṭa*（ニヴィシュタ）は、スータ・ゴースヴァーミーが『シュリーマド・バーガヴァタム』の甘露を耳から飲んだということを表わしています。それが『シュリーマド・バーガヴァタム』を受けとるほんとうの方法です。正しい人物から一心に聞けば、主クリシュナの存在をすべてのページをとおして理解できます。『シュリーマド・バーガヴァタム』を知る秘訣がこの節で述べられています。心が純粋でなければ、全霊を傾けることはできません。行動が純粋でない人は、心を純粋にすることもできません。そして、食べること・眠ること・恐れること・子孫を作ることでも純粋にならなければ、純粋な心を持つことはできません。しかし、なんとかして正しい人物から一心不乱になって『シュリーマド・バーガヴァタム』を学べば、学び始めた当初から、各ページのなかに主シュリー・クリシュナを確実に見ることができます。

*これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第１編・第３章、「クリシュナはすべての化身の根源である」の要旨解説を終了します。*